

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第45号

墓域の中の集団構成（後編） —近畿地方の周溝墓群の分析を通じて—	岩松 保	1
瓦谷古墳出土の靱について	筒井 崇史	16
中海道遺跡の再検討(1)	中川 和哉	24
—平成4年度発掘調査略報—		34
1. 細谷古墳群	3. 大切遺跡	
2. 平安京 左京一条二坊十町	4. 今城跡	
研究ノート 丹後の製鉄遺跡	増田 孝彦	41
資料紹介 左坂C-18号墳出土の渦巻き状鉄製品	石崎 善久	46
府内遺跡紹介 56. 六波羅政庁跡		50
長岡京跡調査だより		53
センターの動向		56
受贈図書一覧		58

1992年9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 墓域の中の集団構成(後編)

—近畿地方の周溝墓群の分析を通じて—

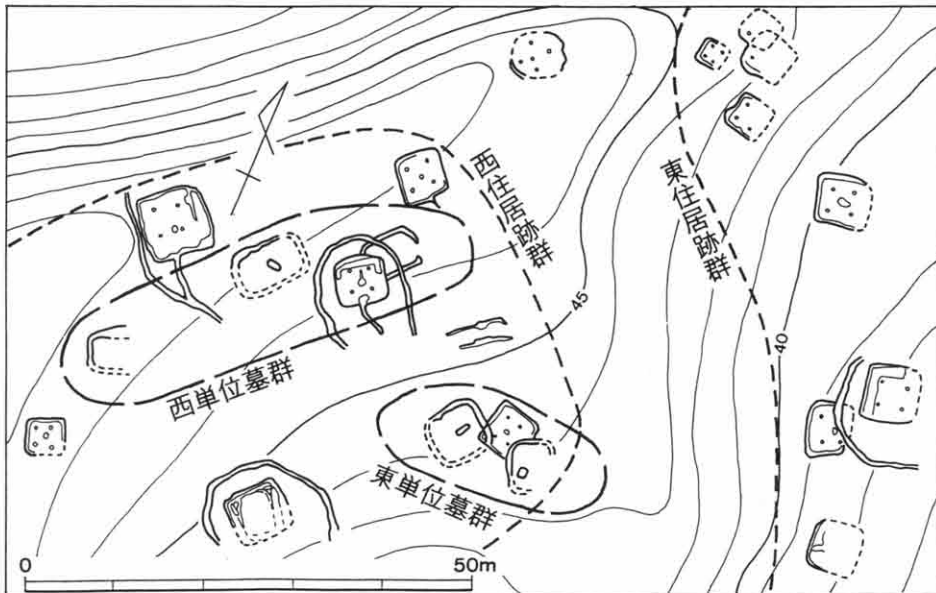
岩松 保

## 3. 墓域構造の具体相

## 2) 弥生時代後期の様相

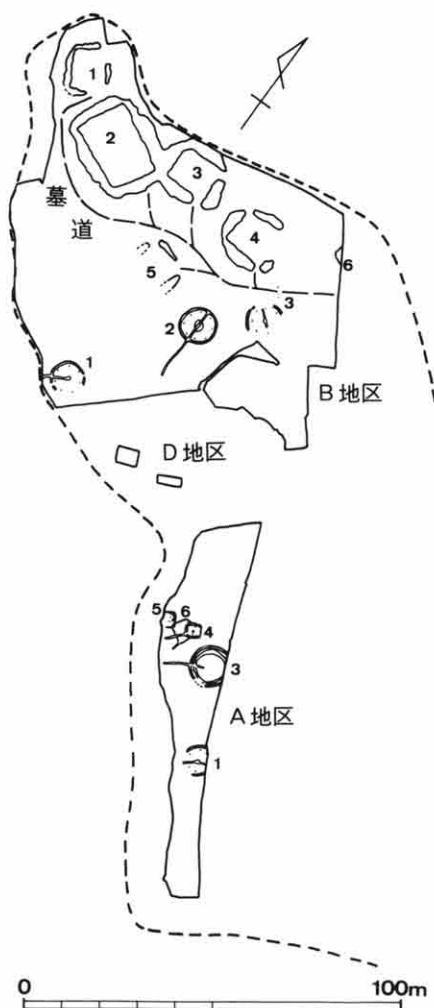
高槻市紅茸山遺跡では弥生時代後期中頃の周溝墓五基が調査された。周溝墓の分布から空閑地を夾み西群と東群に分けられる。西群は丘陵の尾根上の三基で、東群は東へ張り出す平坦部上の二基で、それぞれが単位墓群と捉えられる。当遺跡は二群の単位墓群で構成される小墓域をなす。五基の周溝墓のうち三基で主体部が検出され、それらはすべて一基で、単独墓と断定できないまでも、少なくとも単独墓を指向する傾向にあると言えよう。

さて、紅茸山遺跡では同時期の竪穴住居18棟が調査されており、住居の配置から大きく西群と東群に二分して捉えられている。西群は丘陵尾根上の高所に位置し、やや良好な場所を占地しているのに対し、東群は丘陵尾根下の緩傾斜地を占地している。両群ともに、同一等高線上に位置する大小の竪穴住居が一組になって、それぞれ三～四の小群に分かれ



第5図 紅茸山遺跡遺構配置図(拠 原口1977)

るものと考えられている。<sup>(注14)</sup>この小群は「住居跡小群」、東群・西群は「住居跡群」と捉えられる。<sup>(注15)</sup>周溝墓と竪穴住居とは一部重複関係を持ち、周溝墓は「そのほとんどは時期が明らかでないが、住居廃滅後につくられた可能性がある」(原口1977 傍点引用者)と報告され、この丘陵上が居住域から墓域に転用されたことが窺われる。おそらく、紅茸山ムラの住人が低所に移住した後に、もとの居住地を墓域として利用したのであろう。この想定が正しいとすると、低所のムラが近在の「丘陵上」に小墓域を設けたことになり、弥生時代中期までの「居住域に近接した墓域」という集落内の空間利用方法が変化をきたしたことになる。庄内期の「発生期古墳」もまた、丘陵上や丘陵端に造られ、居住域とはやや離れた場所を占めている。その「立地」と「居住域との位置関係」の点で、この紅茸山遺跡の



第6図 寺中遺跡遺構配置図と墓道  
(拠 吉識・岸本ほか1989)

周溝墓は、発生期古墳や古墳の「萌芽」を有していると言えよう。

後期における小墓域の単複を高槻市郡家川西遺跡を例に見ておこう。同遺跡では弥生時代後期の住居跡と周溝墓が調査されており、南北約300m、東西400m以上の範囲にわたって居住域が広がっていることが判明している。周溝墓は二地区で検出されており、居住域に南接した地区と南に約400m離れた地点である。後者の小墓域に関して、富成哲也は「北方に位置する集落との一帯関係を考えるには、今だ資料不足」とまとめたが(富成1979)、その後の調査によっても北側の居住域と関連づける資料は確認されていない。上述の紅茸山遺跡では低所の居住域と丘陵上の小墓域が対応し、ムラからある程度の距離を隔てて墓所を設けたことが想定された。このことから、郡家川西遺跡の二地区の小墓域も距離的にかなり隔たっているが、同一のムラによるものと捉えることが可能で、複数型の墓域構成をとるものと考えられる。さらに、弥生時代中期や庄内・布留期の墓域は複数型の小墓域構成をとることから、具体的な資料

では検証されえないが、後期においても複数型の小墓域構成をとるものとした。

寺中遺跡は兵庫県洲本市に所在し、弥生時代後期の周溝墓六基と八基の竪穴住居が調査されている(吉識・岸本ほか1989)。A区とB区間のD区は谷状の地形となっている。調査により小墓域と居住区が確認されているが、丘陵の東部が未調査であるため居住区はさらに増えるものと思われる。

A区では五棟の竪穴住居があり三棟前後(未調査部分を考慮するとこれ以上)が同時期に建ち並んでいたと推定される。B区では三棟の竪穴住居と六基の周溝墓が検出され、三～四棟の竪穴住居で居住区を構成していたと復元されている。注目されるのは大形住居の分布である。吉識雅仁は、A区は大形住居が一棟のみで他は「普通規模」のものであり、A区の大形住居は「集落あるいは集落を構成する単位集団の中心となる住居址」と位置づける。そして、B区は大形住居のみで構成され、A区の大形住居(A-3)よりは規模が小さいものの「普通規模」よりは大形であり、しかもすべて大形の住居であるため、単位集団の中心的な建物という評価はあたらなとした。さらに、B群を「集落を構成する1単位集団と考えられ、集落内にあっては、他の集団よりは大規模な住居だけで構成された単位集団」とし、周溝墓群を背後に築造していることから、B群を有力な集団と推定した。大形住居群と小形の住居群で集落内が二グループに分けられ、しかも居住区を異にしているのは重要である。さらに、同報告中で岸本一宏は、周溝内出土土器の比較と陸橋の位置、空閑地の検討から、周溝墓群の間に墓道を復元した。それによると、墓道を介して周溝墓1・2・3・4・6の東群と周溝墓5の西群に分けられる。周溝墓5の西側は削平を受けており、数基の周溝墓が存在したのかもしれない。岸本は東群の周溝墓群を大形住居のみで構成しているB区の住居址群と、西群の周溝墓群をA-3住居址を中心とするA区の住居址群と対応するものと推察している。しかし、明らかに居住区が異なるA・B区の住人が、小墓域を「共有」するのは考えにくい。住居規模が集団毎で差があるのは、集団単位で集団構成、即ち血縁関係のあり方が異なることであり、いわば「階層」や「出自」が異なる集団であろう。そういった複数の集団で同一の小墓域をA区から離れたB区の背後に「営む」のはうなづきがたい。B区の周溝墓群は東西二単位の単位墓群による小墓域であり、子細に見ると、B区の竪穴住居は東群の二棟と西群の一棟に分かれるが、これがそれぞれ単位墓集団と想定され、B区の小墓域はB区の竪穴住居群をその小墓域集団として形成されたのであろう。

ここでもう一度、紅茸山遺跡の墓域を見てみよう。竪穴住居群と周溝墓群がともに同一のムラの人々によって大地に記された痕跡だとすると、移住前の住居群と移住後の周溝墓群の間に対応関係が想定される。同一の丘陵上に立地しているが、東群・西群は「住居跡

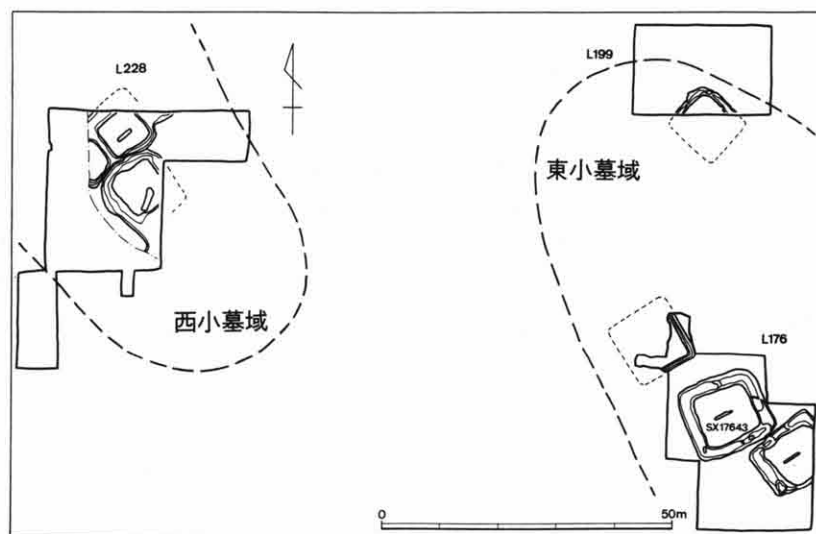


群」と位置づけられ、先述の寺中遺跡のA区・B区に相当し、それが極めて近接しているものと捉えられる。寺中遺跡の例から推察すると、東・西の住居跡群が東・西の単位墓(群)に単純に対応するのではなく、どちらか一方の住居跡群の小墓域として位置づけられるのである。おそらく、高所に位置する西群の住居跡群の住人の小墓域であろう。

紅茸山遺跡・寺中遺跡では、周溝墓を築く小墓域集団・単位墓集団数の減少が見られるが、ムラの大多数の人々はどこに葬られたのであろう。注目されるのが、「共同墓地」の成立である。近年、狭い範囲に数百基から千基を越える土壙が密集している例が知られるようになった。福永伸哉は、密集型土壙群は一般庶民の共同墓地であり、弥生時代後期後半以降に成立するとして(福永1989)。(注17)共同墓地の成立が弥生時代後期後半に遡るという指摘は重要である。従来の周溝墓を中心とした小墓域とは別に、一般のムラ人が葬られるべき墓地が成立する。そこは無区画墓のみで構成されており、周溝墓を築く小墓域集団との間に階層差が見られる。加えて、弥生時代後期には周溝墓は単独墓の傾向を強め、周溝墓への被葬者はさらに限定されているので、周溝墓を築く単位墓集団の成員であっても、周溝墓に葬られないで共同墓地に葬られる人々が存在したことが想定される。

### 3) 庄内期・布留期の様相

長岡京市馬場遺跡では庄内～布留期の墓域と居住区が確認されている。左京108次調査では井戸が検出されており、この周辺に居住区が広がっているものと推定される。墓域は居住区の南側に広がっている。左京228次調査では周溝墓三基が調査されており「周溝を共有し、供献土器が少な」く、左京176次調査で検出した三基の周溝墓は「周溝が各々完

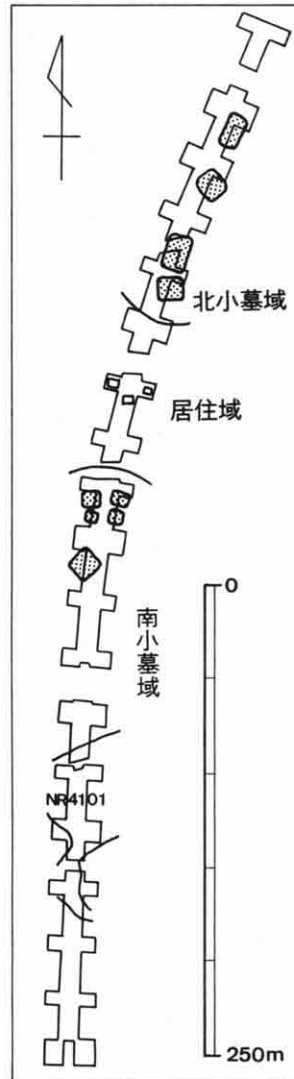


第7図 馬場遺跡墓域配置図(拠 木村1989・1990、千喜良1991)

結し、供献土器も比較的多い」といった特色をもつ(山本1991)。両調査区とも、庄内期の周溝墓である。周溝墓群の群集形態と供献土器のあり方の差とともに、左京176次調査地と左京228次調査地は約100mの間隔があり、それぞれ別の小墓域—東・西の小墓域と推定される。左京199次調査区では一基の周溝墓の北側コーナー部が調査されており、周溝内より布留式の土器が出土している。この周溝墓は独立した溝をもつことから、左京176次調査の周溝墓群と一連のものと考えられ、東小墓域の一部をなす。そうすると、東小墓域は南から北に向けて造墓が行なわれたと復元できる。当遺跡の七基の周溝墓のうち、台状部に主体部を検出したのは四基であり、すべて単独の埋葬墓で東西に主軸をもつ。当然、台状部の削平に伴う埋葬墓の消失を考慮する必要があるが、検出した主体部数がすべて一基のみというのは、削平されて消失したという以上の意味がある。SX 17643の主体部に小形仿製鏡の破鏡が副葬されていたのは重要である<sup>(注18)</sup>。

亀井北遺跡は八尾市に所在し、亀井遺跡に北接しているが、庄内・布留期にはNR4101を境にして亀井遺跡と分かれている。亀井北遺跡では掘立柱建物が建ち並ぶ居住区を挟んで北と南に小墓域が認められる。南小墓域では五基の周溝墓が検出されている(山上ほか1986)。1～4号は「非列状」に近接して築造されており、約15mの空閑地を隔ててやや大形の周溝墓が検出されている。周溝墓の配置は中期のあり方に近似している。2号墓は台状部に木棺墓一基と土器棺一基を有しているが、総体として単独墓を指向する傾向にある。北小墓域は南小墓域と異なって、大形の周溝墓が南から北に向けて「一列状」に築造されている(小野・服部ほか1986)。それぞれの周溝は独立しており、連接・共有するものはない。これらも庄内期の造営になり、馬場遺跡同様、単独墓を指向している。

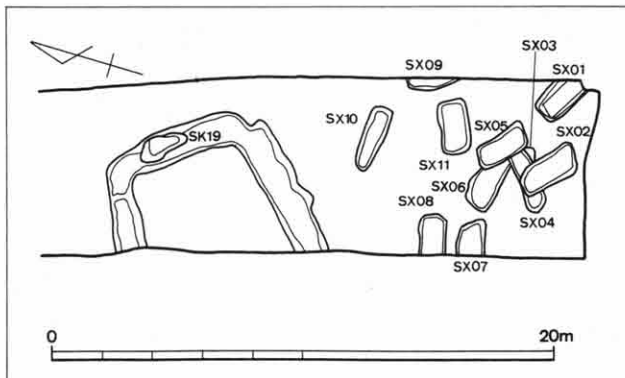
馬場遺跡や亀井北遺跡で見られる「一列状」に築造される周溝墓群は「非列状」の配列のもの比べて大形であり、主体部に破鏡の副葬が見られることから、すくなくとも、そのムラの「首長クラス」の単位墓群(=小墓域)と推測される<sup>(注19)</sup>。しかも、個々の周溝墓の周



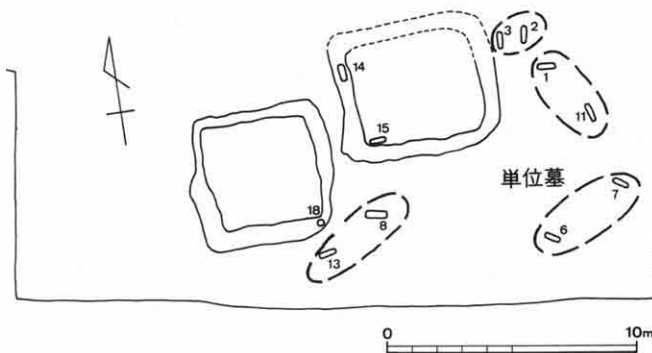
第8図 亀井北遺跡小墓域配置図(拠 小野・服部1986、山上1986)

溝は各々が独立しており、溝の共有や接続が見られないのは、血縁紐帯を背景に「その小墓域に葬られるべき人格」といった旧来の造墓原理から脱却した所に被葬者が位置していることが窺える。そういう意味で、大きくは血縁紐帯を小墓域のまとまりに認めうる一方で、社会的にも成長しつつある「首長層」が想定されるのである。かたや、「非列状」の周溝墓群は上述の例以外に、八尾市成法寺遺跡(周溝墓四基：単独墓を指向)<sup>(注20)</sup>・同市東郷遺跡(周溝墓七基：単独墓を指向)で認められる。これらは、「一列状」の周溝墓と比べて、規模は小形であり、群集して造られ周溝の共有や接続を認めるものもある。いわば、旧来の周溝墓とよく似た配置をとり、単独墓に変質している点で一定の社会的な成長を認めうるも、基本的には血縁原理をその造墓の背景に有しているものと考えられる。

さて、単独の周溝墓に土壙墓群がとりつく例も見られる。大阪市瓜破北遺跡では同時期の居住区はよく分かっていないが、布留期の周溝墓一基が調査されている。北・東・南には他の周溝墓を示唆する遺構は確認されていない。台状部で主体部は検出されていないが、周溝墓の周辺から内行花文鏡片と方格規矩鏡片が出土し、本来は周溝墓の主体部に副葬されていたものと推定されている。東周溝内ではS K 19が検出され、溝内埋葬の可能性が指



第9図 瓜破北遺跡周溝墓・土壙墓群配置図(拠 永島ほか1980)



第10図 田能遺跡周溝墓・土壙群配置図(拠 石野ほか1982)

摘されている。この周溝墓には隣接して11基の埋葬墓群が確認され、うち1基は箱型木棺の痕跡が認められる。これら11基の木棺墓・土壙墓群は、土壙の長軸の方向で分類すると、A群(SX01、SX02、SX05)、B群(SX06、SX10)、C群(SX07、SX08、SX11)と三グループに分類できる。これらの各グループは単位墓と認められ、A～C群は全体で単位墓群をなす。報告書では「方形

周溝墓を瓜破北遺跡の当該時期の首長墓に指定し、土壙墓群を世代を累ねてこの首長に対し社会的・身分的に従属的な地位にあった者の墓と解することができよう」と捉えている(永島ほか1980)。

同様の例は尼崎市田能遺跡の布留期の周溝墓と周囲の埋葬墓群で見とれる。ここでは、二基の周溝墓と11基の木棺墓・木蓋土壙墓で構成され、周溝墓は独立した四周の溝を有している。木棺墓・木蓋土壙墓の主軸方向に着目すると、6・7号墓、2・3号墓は墓壙の主軸が揃い、8・13号墓もその主軸は近似する。さらに分布のあり方を考慮すると、埋葬墓は大きく三群に分かれて、<sup>(注21)</sup>おのおの単位墓をなす。この田能遺跡の例もまた、瓜破北遺跡と同様に「首長クラス」とその「社会的な身分の従属者」と考えてよからう。

ここで検討を加えておくべきことは、弥生時代中期でも単独の周溝墓に数基の埋葬墓群が「とりつく」例があることである。例えば、中期の瓜破遺跡や東奈良遺跡などで認められる。これらは複数の埋葬墓が台状部にあり、溝内にも複数の埋葬墓が想定される。中期における周溝墓の台状部や溝内での埋葬墓群の結合紐帯はあくまでも「血縁=家族」と考えられることから、「周溝外」の埋葬墓群の結合紐帯も「血縁=家族」と考えざるをえない。すなわち、神足遺跡や宮之前遺跡の墓域で見られる「周溝墓(=家族)+土壙墓群(=家族)」の範疇で捉えるべきである。一方、庄内・布留期の瓜破北遺跡や田能遺跡の周溝墓は、溝内埋葬されているとしても台状部は単独と推定され、総体としても基本的には単独墓を指向している。すなわち、台状部埋葬を首長、溝内埋葬をその家族と考えられるのである。<sup>(注22)</sup>単位墓としての周溝墓は弥生時代中期のものとは明らかに変質しており、周溝墓と周辺の土壙墓群との間に「社会的な階層」を結合紐帯に想定しなければならない。

瓜破北遺跡や田能遺跡などでは、一基の周溝墓の周囲に木棺墓・土壙墓が埋葬され、「社会的」な階層関係が背景に想定される。瓜破北遺跡の周溝墓では破鏡が副葬されていたと考えられるため、亀井北遺跡などで見られるような「一列」状の配列(優位な単位墓群)が何らかの理由で一基のみの築造で途絶えたものであろう。

#### 4. 単位墓集団・小墓域集団の変遷

前節では各時期の墓域構成の具体相を「墓域分割原理」の視点で検討した。この節では小墓域集団・単位墓集団の時期的な変遷を中心に考察し、各時期の墓域模式図を示す。

##### 1) 弥生時代中期の集団構成

弥生時代中期の墓域構成のモデルはすでに第2節で触れたところであるが、集団関係を中心に簡単に振り返っておこう。

集落の墓域は数ヶ所の小墓域に分割されていることから、集落は数個の集団(=小墓域

集団)に分かれているものと推定される。これらの小墓域集団は各々独立した墓所を占有している点に、小墓域集団相互の「自立性」が看取される。そして、ムラは小墓域集団が「ゆるやかに」集合しており、それゆえ、ムラの経営は小墓域集団を単位に「協同して」行なわれているものと考えられる。さらに、各小墓域集団は複数単位の単位墓集団で構成されている。周溝墓などの単位墓は、血縁関係を結合原理として造営された「家族墓」と考えられる。この場合の「家族」は近畿地方中央部においては「世帯共同体」と考えられ、単位墓の営造主体(=単位墓集団)は「世帯共同体」と判断される。周溝墓は台状部と周溝内とを埋葬の場を使用している。台状部の埋葬終了後に周溝内に埋葬の場を求めたのではなく、同時的に両者に埋葬を行っていることから、単位墓集団=世帯共同体内は「台状部被葬集団」と「溝内被葬集団」に生前から分かれているものと推定される。世帯共同体内の有力家長世帯とそれ以外の世帯と捉えられよう。この格差は池上遺跡の前期末の周溝墓でも見られるので、周溝墓出現以前の社会において生じていたものと考えられる。

特定の小墓域には大形周溝墓の遍在や無区画墓との並存などが見られ、単位墓集団間において格差が認められる場合がある。これら優位な集団は「有力単位墓集団」と位置づけられ、小墓域集団相互には質的な格差は見られない。それは各小墓域で周溝墓を主たる墓制として採用していることから推測される。そのため、「有力単位墓集団」とその他の単位墓集団との間の格差は、あくまでも「周溝墓制」の枠組みの中で見られる「量的」なものと言えよう。

## 2) 弥生時代後期の集団構成

弥生時代後期の墓域は不確定なところが多い。ここでは大胆な推測を交えてモデル化を図り、集団構成を推定したい。

郡家川西遺跡の例から、後期においても複数小墓域型の墓域構成をなしていると推測されるが、小墓域の数は減少するものと考えられる。そして、一小墓域が複数の単位墓群で構成されるのは弥生時代中期と同様である。しかし、紅茸山遺跡・寺中遺跡の小墓域はともに二群の単位墓群で構成されており、中期の小墓域と比べると、小墓域を構成する単位墓群の単位数の減少が見られる。弥生時代中期の小墓域集団が、後期には周溝墓を単位墓として採用する単位墓集団と採用できない単位墓集団に分化し、小墓域集団の規模の縮小、すなわち、階層分化が進展したと解釈できよう。さらに、周溝墓は単独墓の傾向を強めることから、小墓域集団・単位墓集団の成員すべてがこの小墓域・単位墓に葬られたとも考えられない。弥生時代後期においては、中期の周溝墓を中心とした小墓域とは別に、一般のムラ人が葬られるべき共同墓地が成立する。周溝墓を築く単位墓集団内においても周溝墓に葬られない人々が存在するが、彼らもまた共同墓地に葬られたのであろう。すなわち、

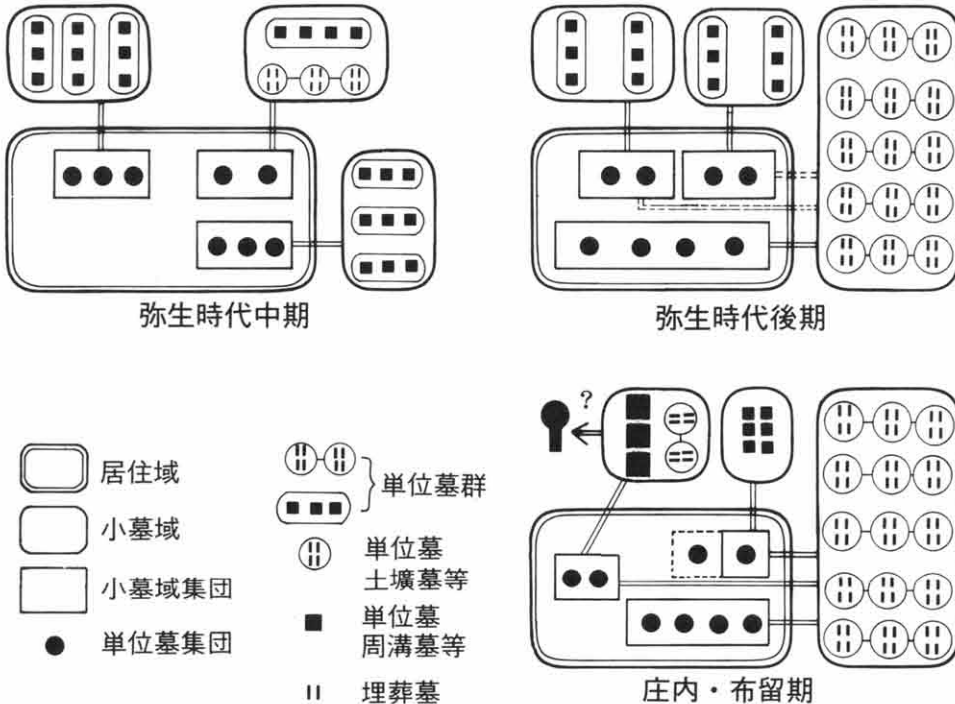
周溝墓は集落内の数単位の単位墓集団の中の一部が葬られる極めて階層的な墓制に変質したのである。周溝墓は台状部・溝内ともに埋葬を行っているので、おそらく、単位墓集団の長が台状部、その近親者が溝内に葬られたのであろう。

小墓域集団は周溝墓を築き独立した墓所を持つ小墓域集団と共同墓地に墓所をもつ小墓域集団とに分かれ、中期における等質な小墓域集団のあり方から変質している。そこに階層的に成長した小墓域集団が見て取れ、ムラの経営はこれら有力な小墓域集団の手に「委ねられた」と推察される。実際には有力小墓域内の数単位の単位墓集団の中の一部が「有力小墓域集団」の利益を代表していたのであろう。

### 3) 庄内・布留期の集団構成

庄内・布留期においては、弥生時代後期と基本的には変わらず、後期と比べてさらに階層分化が進み、集落内の格差が増大した様相を呈する。

墓域は複数の小墓域が居住域の周縁に分布する墓域複数型である。しかし、その様相は大きく異なっている。小墓域内の単位墓群は基本的には一単位墓群で小墓域を占有しているが、単位墓群のあり方には、「非列状」の配列をなすものと、周溝墓の周溝が各々独立して「一列状」に作られる二態が捉えられる。後者が周溝墓の規模も大きく、破鏡の副葬がなされており、前者と比較して有力な集団の単位墓と判断される。庄内期には発生期古



第11図 時期別墓域モデル図

墳の築造が見られる。発生期古墳は少なくとも「地域首長」の墓と考えられるため、「優位な」周溝墓群＝「列状」の周溝墓はその集落内の首長系列の墓所と把握できよう。「非列状」配列の周溝墓群は弥生時代中期の配列を踏襲しているため、この小墓域集団は旧来の血縁紐帯を造墓原理に強く保持した集団であり、社会的・階層的に成長しきれていない「首長に次ぐクラス」の単位墓群と把握できよう。

周溝墓は台状部に埋葬墓を一基のみもつ単独墓の傾向を一層に強め、台状部＝首長、溝内＝その家族の構成をとる。瓜破北遺跡や田能遺跡などで見られた周溝墓のまわりの土壙墓群はその小墓域集団内の他の単位墓集団と捉えられ、周溝墓に葬られた首長と社会的・階層的な関係で結びついた「階層墓」と考えられる。

##### 5. まとめ－墓域の変遷からみた格差の進展－

最後に近畿地方中央部の周溝墓社会の進展を整理して、まとめとしたい。

###### ①単位墓としての周溝墓の出現(I期新)

弥生時代以前においては血縁関係を結合原理として、数基の埋葬墓で単位墓を構成している。春成秀爾は滋賀県滋賀里遺跡(縄文時代晩期中葉～末)を考察し、「墓群は東北を向くグループと西北を向くグループの二群に分けられる。そして、どちらも大よそ6小群からなりたっている。1小群は4体前後を含んでおり、それぞれ男女1対1の割合となっている」とした(春成1985)。この四体前後の小群は「単位墓」と捉えられる。墓域の中で各単位墓が占める場所に中央部・縁辺部などの差異こそあれ、「無区画」の等質的な単位墓によって構成されている。これは、ムラが中心的な集団とそうでない集団に分かれていたことを示すではあろうが、基本的に単位墓集団間に格差は認められない。

弥生時代前期には、それまでの「無区画」の等質的な単位墓から、周溝墓という区画を有した単位墓が出現してくる。現時点ではI期新段階の和泉市池上遺跡や堺市四ツ池遺跡などで検出された周溝墓が最も古い例である。しかし類例は少なく、おそらく、周溝墓という墓制が「出現」したという点で重要な意味を有するが、各集落で「有力家族」が出現したという「証」ではなからう。<sup>(註25)</sup>当初は「先進地」でのいわば、「進歩的」な墓制としての意味合いが強く、一部の集団が周溝墓を築造したのであろう。その後、一般的な墓制として完成されつつ、近畿以東に伝播・定着する。

###### ②単位墓集団における格差の出現(Ⅲ期?)

周溝墓が一般的な墓制として、すなわちムラの構成員全員が葬られるものとして定着するのが弥生時代中期である。各集落は数個の小墓域集団に分かれ、小墓域集団は数群の単位墓集団によって構成されている。小墓域集団はそれぞれ独自の墓地(＝小墓域)を居住域



の外縁に「占有」している。このことから、小墓域集団は相互にある程度「自立」して、ゆるやかな結合をもって集落を構成していたと推測される。

周溝墓が一般的な墓制として定着した後に、「無区画墓」が周溝墓群に近接してつくられる。これは、旧来の「無区画墓」と厳密に区別する必要がある。それは、社会的な格差のため、周溝墓の築造を「制限」された集団が生み出されたと考えられるからである。この「無区画墓」は、周溝墓群とともに、それぞれが単位墓群として一つの墓域を構成する。「無区画墓」は「区画墓」集団より階層的に低い単位墓集団の墓制と考えられるので、まず、小墓域集団内において単位墓集団間に階層差が生じてくるのである。<sup>(注26)</sup>

### ③有力単位墓集団の出現(Ⅲ期新)

近畿地方における大形周溝墓の成立は中期中葉にさかのぼる。東大阪市瓜生堂遺跡2号墓は木棺と土壙墓・土器棺総数18基が埋葬されており、その単位墓集団の大きさが特筆される。また、大阪市加美遺跡Y1号墓(Ⅲ期新～Ⅳ期)では23基の木棺が埋葬されており、他の種類の棺は埋葬されていない。これらの大形の周溝墓は小墓域内は言うに及ばず、集落全体―他の小墓域の中での「有力」な単位墓集団と捉えられる。すなわち、特定単位墓集団が階層的に成長し、小墓域内に限られた「優位性」から集落全体の中での「優位性」を獲得するのである。しかし、他の小墓域でも周溝墓を採用することから、絶対的な格差をそこに想定することはできない。

### ④有力単位墓集団の成長と有力小墓域集団の出現(V期後?)

小墓域の数が減少し、しかも小墓域集団を構成する単位墓集団の数も減少することから、周溝墓を築造できない単位墓集団の範囲が拡大されたと考えられる。しかも、周溝墓は個人墓を指向する傾向にあり、周溝墓を造営する単位墓集団の成員であっても、周溝墓に葬られない人々が存在することとなる。これら周溝墓に葬られない人々は少なくとも後期後半には成立している共同墓地に葬られる。すなわち、周溝墓は弥生時代中期までの一般的な墓制としての様相を変え、集落内の有力単位墓集団のみが築きうる墓制となるのである。有力単位墓集団は数個で小墓域集団を形成し、有力小墓域集団としてその他の単位墓集団・小墓域集団に優位であるとともに、有力単位墓集団内においても周溝墓に葬られる者とそうでない者に分化しているのである。<sup>(注27)</sup>

### ⑤「社会墓・階層墓」としての周溝墓の変質(庄内期)

周溝墓などのある一定の空間を占有する墓は、旧来の血縁関係を紐帯とした単位墓集団から家族内の特定個人数人を葬るものへと転化する。破鏡を埋納する加美遺跡や瓜破北遺跡などの大形の周溝墓群と小形で「非列状」の周溝墓群、主として一般成員の葬られる共同墓地というように、葬られる墓所に階層差が歴然と見られる。その背景には、ある階層



や社会的な地位をその結合紐帯としていることが想定されるため、家族墓に対して、「階層墓」・「社会墓」とも呼称すべきものである。一方で、発生期古墳が出現し、これを地域首長の墓と捉えれば、大形の周溝墓はムラの首長、小型の周溝墓はムラの首長に次ぐ階層の墓と考えられる。<sup>(注28)</sup>「ムラの首長」と「ムラの首長に次ぐ階層」は、小墓域が異なるので、ムラの中の異なる集団の「長」と考えられよう。

## 6. おわりに

古墳が出現した後も、周溝墓の「階層墓」としての性格は変わらずに、いわゆる「前方後円墳体制」に組み込まれ、より厳密な体系の中で存続するものと考えられる。そういう意味では、庄内・布留期の周溝墓は、方墳や埋没小古墳(岸本1986)、古式小古墳(細川1988)等、「古墳」の概念で取り扱う対象とすべきかもしれない。小論では、弥生時代前期末に畿内に「出現」し、その後、東日本へ汎日本的に広がった弥生墓制としての周溝墓が、社会の発展と共に、どのように変質し、その被葬者が古墳への階梯をどのように昇って行ったかを明らかにすることに主眼を置いた。そのため、周溝墓という語句を一貫して使用した。

周溝墓は「前方後円墳体制」の成立と共にその中に組み込まれ「古墳」へと変質したが、その兆候は弥生時代後期の「有力小墓域集団の成立」に見て取れる。この時点の周溝墓の変質が、その後の周溝墓の階層性を決定づける節目となった。それとともに、前方後円墳をはじめとする古墳の被葬者を生み出す「下地」を用意したのである。

この小論をまとめるにあたって、都出比呂志先生、松井忠春氏には論旨から文章表現に至るまで色々と御教授をえた。また、伊野近富、田代 弘、岩崎 誠、山本輝雄、木村泰彦、原 秀樹各氏には有益な御教示をいただいた。末筆ながら記して感謝の意に替えます。

(いわまつ・たもつ=当センター調査第2課調査第4係調査員)

注14 報告者の原口はこの大小の堅穴住居が一組になった三～四群を三～四回の建て替えと捉え、各群における一時期の堅穴住居数は二棟と考えているが、堅穴住居で切り合いが認められるのは18棟中四棟(切り合い関係2)のみで、住居群の移動を積極的に肯定する材料はない。

注15 住居跡小群、住居跡群については別稿(岩松1991)で論じたところである。

注16 集落を構成する一要素としての居住域内は等密度で住居が配置されているのではなく、空間的に集中して住居が建てられている。この「集住」する地区を居住区と呼びたい。

注17 福永は堺市長曾根遺跡の密集型土壇群を検討し、「土壇群はまず四箇所の大きな群に分かれ、各大群の中が数個から十数個の小群に分かれ、さらに小群の中に二～三基の土壇からなる最小単位が存在」することに着目し、慎重な態度を保ちつつも、大群を各集落に、小群を世帯共同体に、最小単位を世帯に相当するとの見通しを述べている。筆者は集落の枠を越えた「共同墓地」という評価に対しては否定的である。一方で、田代 弘は京都府由良川流域の弥生時代集

落を分析した。それによると、福知山市興遺跡では楕円～不整形な円形を平面形態とする50余基の土壙群が見つかり、合せ口壺棺が検出されていること、脂肪酸分析では高等動物由来の脂肪酸が検出されていることから、土壙墓群の可能性を強く指摘している。また、綾部市青野遺跡においてもⅣ期の同様の土壙群が検出されている(田代1991)。これらが共同墓地の早い例となるか、宮之前遺跡や神足遺跡のように周溝墓群+土壙墓群の例と把握できるかは、今後の課題であり、それにより後述第5節の各「階梯」も少なからず変更の必要性がある。

- 注18 破鏡は鏡片に穴がけられており、ペンダント・トップとして使用されたものと復元される。厳密な意味では副葬品ではなく「着装品」である。しかし、特別な意味を持って伝世され、その象徴的な意義が消失した時点で、首長の遺骸と共に埋葬されたという経緯を考慮すると、単なる着葬品ではなく副葬品と捉えられる。
- 注19 寺沢 薫は、弥生時代の畿内における舶載品の希少さを明らかにし、庄内期の舶載品の量的な増加をみて、結果としてこれらの墓への副葬を可能にしたと指摘している(寺沢1985)。
- 注20 報告中で「市松状」と形容されているものを「非列状」と文中で呼称している。庄内期のこの類例は生駒西麓を中心に分布するようであり、地域を越えた普遍性を有するかは今後の課題である。また、後述のように、「非列状」の周溝墓群は「首長につぐクラスの単位墓群」と考えられるため、集落規模の大小や集落構造に係わってくるものと想定され、この点において地域差があったのかもしれない。
- 注21 14・15・18号墓は周溝墓の台状部・周溝に重なっており、台状部埋葬または溝内埋葬と捉えられるため、ここでは除外する。
- 注22 この点に関しては他の論考で論じたところである(岩松1992)。
- 注23 注22に同じ
- 注24 後期前半の周溝墓として著名な巨摩遺跡の2号周溝墓は多くの埋葬墓を台状部に葬るため、極めて中期的な様相として把握できよう。
- 注25 山賀遺跡ではⅡ期の周溝墓が調査されているが、すべて主体部が単独で、しかも小児にまで木棺を使用しており、池上遺跡や他の中期のものとは明らかに異なる。これを「方形周溝」墓制の成立・伝播における際の「混乱」と位置づけたい。上西美佐子は木棺の材質・構造の比較検討から、弥生時代中期から後期にかけて墓制が確立したとする(上西1984)。
- 注26 田中清美は瓜生堂遺跡全体の周溝墓を東群と西群に分け、「方形周溝墓群と土壙墓群間のみならず、方形周溝墓相互間にも墳丘の規模や埋葬主体の構造などに明瞭な格差をみつけることができる」と指摘した(田中1986)。本文中の「②単位墓集団における格差の出現」と「③有力単位墓集団の出現」は瓜生堂遺跡では同時期的に見られるが、宮之前遺跡では中央小墓域において周溝墓と土壙墓群が混在するが、中央小墓域の周溝墓が他の小墓域と比較して大形の周溝墓で構成されている事実は認められない。すなわち、本文中の階梯で格差が進展したと考える。
- 注27 この場合の「小墓域集団」は共同墓地内にそれぞれの小墓域を有し、「集合型の小墓域構成」ととらえる。
- 注28 発生期古墳＝地域首長、大形周溝墓＝小地域首長、周溝墓＝ムラの首長とも考えられる。しかし、「ムラの首長連合」の長＝小地域首長、「小地域首長連合」の長＝地域首長と考えられるので、ある小地域首長はムラの首長をも兼ねているはずである。そうすると、一つのムラに周溝墓を築く複数の小墓域が存在する場合、一方を「小地域首長」墓、他方を「ムラの首長」墓と考えることはできない。ムラは「首長とその血縁集団」による単独的な支配を行っていたのではなく、集落内の集団毎に「長とその血縁家族」があり、その頂点に立つのがムラの首長

であったのであろう。

参考文献(報告書関係は主要なものに限った)

- 岩崎 誠 1991 「弥生時代 神足遺跡」『長岡京市史』資料編 1
- 岩松 保 1991 「住居の配置と通路——通路から見た集落構成」『京都府埋蔵文化財論集』第2集  
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 1992 「溝内埋葬と方形周溝墓」『究班 埋蔵文化財研究会15周年記念論集』
- 上西美佐子1984 「山賀遺跡出土の木棺について」『山賀(その3)』 大阪府教育委員会・(財)大阪  
文化財センター
- 岸本一宏 1988 「近畿地方の弥生時代墳丘墓について——集落構造把握への一視点として」『網干  
善教華甲記念 考古学論集』 網干善教華甲記念会
- 岸本道昭 1986 「河内平野の埋没小古墳研究予察」『山賀(その5・6)』 大阪府教育委員会・  
(財)大阪文化財センター
- 久保哲正 1986 「乙訓地方の弥生時代墓地について——長岡京市神足遺跡を中心にして」『長岡京  
古文化論叢』 中山修一先生古稀記念事業会 同朋舎
- 多賀谷昭 1988 「鬼虎川遺跡第30次調査出土人骨について」『鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告』  
東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会
- 田代克己 1982 「方形周溝墓に関する一覚書」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上巻 森貞  
次郎博士古稀記念論文集刊行会
- 田代 弘 1991 「由良川中流域の弥生時代中期の集落遺跡について」『京都府埋蔵文化財論集』第  
2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 田中清美 1986 「近畿弥生社会の墳墓」『早良王墓とその時代——墳墓が語る激動の弥生社会』  
福岡市立歴史資料館
- 辻本宗久 1987 「弥生時代の墳墓祭祀について——大阪湾沿岸地域の資料を中心として」『花園史  
学』第8号 花園大学史学会
- 都出比呂志1984 「農耕社会の形成」『講座日本歴史 原始・古代』1 東京大学出版会
- 1989 「弥生時代集落の構成」『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店
- 寺沢 薫 1985 「弥生時代船載製品の東方流入」『考古学と移住・移動 同志社大学考古学シリー  
ズ』Ⅱ
- 中山誠二 1987 「弥生時代終末における上の平遺跡の集落構造」『研究紀要』4 山梨県立考古博  
物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 1989 「中部・関東地方の弥生集団墓の構成について——方形周溝墓群の分析から——」  
『山梨考古学論集』Ⅱ 山梨考古学協会
- 原口正三 1977 「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史 本編Ⅰ』第1巻
- 春成秀爾 1985 「弥生時代畿内の親族構成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第5集 国立歴史民  
俗博物館
- 福永伸哉 1989 「古墳時代の共同墓地——密集型土壙群の評価について」『待兼山論叢 史学篇』  
第23号 大阪大学文学部
- 細川修平 1988 「『古式小古墳』素描」『史想』第21号 京都教育大学考古学研究会
- 水野正好 1972 「古墳発生の論理(1)」『考古学研究』18巻4号
- 山本輝雄 1991 「古墳時代 馬場遺跡」『長岡京市史』資料編 1

吉識雅仁・岸本一宏1989「まとめ」『寺中遺跡 淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ 兵庫県教育委員会

#### 長岡京市神足遺跡

久保哲正・山本輝雄「長岡第9小学校建設にともなう発掘調査概要——長岡京跡右京第10・28次調査(7ANMB地区)」『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会 1980

岩崎 誠「神足遺跡第16次調査」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第4集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1989

原 秀樹「右京第187次(7ANMTT)・209次(7ANMTT-2地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1987

#### 長岡京市馬場遺跡

木村泰彦「左京第176次(7ANLZS地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和62年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1989

木村泰彦「左京第199次(7ANLZS-2地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1990

千喜良淳「左京第228次(7ANLID-2地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1991

#### 高槻市郡家川西遺跡

大船孝弘「65-0・P地区の調査」『嶋上郡衙跡発掘調査概要 高槻市文化財調査概要』3 高槻市教育委員会 1979

大船孝弘「75-D・H・L・P地区の調査」『嶋上郡衙跡発掘調査概要 高槻市文化財調査概要』4 高槻市教育委員会 1980

富成哲也「まとめ」『嶋上郡衙跡発掘調査概要 高槻市文化財調査概要』3 高槻市教育委員会 1979

#### 高槻市紅茸山遺跡

原口正三「紅茸山遺跡」『高槻市史 考古編』第6巻 1973

#### 大阪市平野区宮之前遺跡

原口正三・田代克己ほか『宮之前遺跡発掘調査概報』宮之前遺跡調査会 1970

『新版 池田市史』概説編 1971

#### 八尾市亀井北遺跡

小野久隆・服部文章ほか『亀井北(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986

山上 弘ほか『亀井北(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986

#### 大阪市平野区瓜破北遺跡

永島暉臣慎ほか『瓜破北遺跡 共同溝建設工事に伴う発掘調査報告書』(財)大阪市文化財協会 1980.3

#### 尼崎市田能遺跡

石野博信・村川行弘ほか『田能遺跡発掘調査報告書 尼崎市文化財調査報告』第15集 尼崎市教育委員会 1982

#### 洲本市寺中遺跡

吉識雅仁・岸本一宏ほか『寺中遺跡 淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ 兵庫県教育委員会 1989

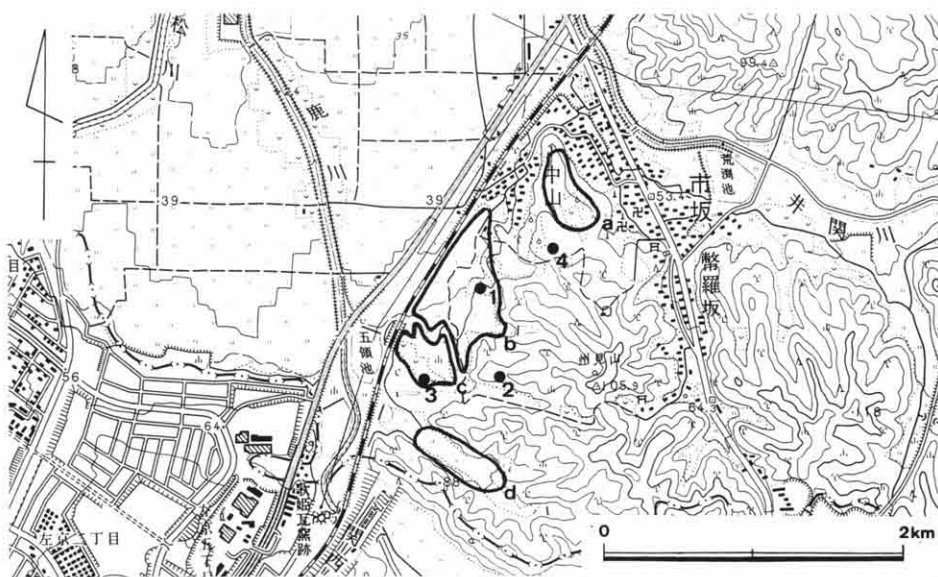
## 瓦谷古墳出土の靱について

筒井 崇史

### 1. はじめに

瓦谷古墳は、京都府最南端の相楽郡木津町市坂瓦谷に所在し、奈良山丘陵から北へ派生する丘陵の一端に位置しており(第1図)、関西文化学術研究都市の開発区域内に所在する遺跡の調査の一部として行われた。この古墳は直径約30mの円墳で、出土した埴輪などから前期後半に位置づけられ、多数の副葬品とともに今回報告する革製漆塗靱1点を良好な状態で検出した。

靱はこれまでに約28個体の出土例が知られ<sup>(注1)</sup>(付表参照)、特に近年は遺存状態の良好な例が増えている。そこで瓦谷古墳出土の靱についても、整理・保存処理の作業中ではあるが<sup>(注2)</sup>、これまでに明らかになった点を報告するとともに、靱の製作技法に関する問題についても述べていくことにしたい。



第1図 瓦谷古墳とその周辺の遺跡

- |        |         |           |         |
|--------|---------|-----------|---------|
| 1.瓦谷古墳 | 2.幣羅坂古墳 | 3.上人ヶ平5号墳 | 4.西山塚古墳 |
| a.西山遺跡 | b.瓦谷遺跡  | c.上人ヶ平遺跡  | d.瀬後谷遺跡 |

## 2. 靱の出土状況

瓦谷古墳の調査は周辺部の調査成果を踏まえて、平成2年度に墳頂部を含む古墳の北半部について行った。なお、今回の調査成果については概報等に譲ることにする。<sup>(注3)</sup>

靱は、墳頂部に営まれた2基の埋葬施設のうち、第2主体の組合式木棺(内法長4.3m・同幅約0.4m)内から出土した。棺内は、2か所の仕切り板を設けて3つの空間に区分されており、靱は南側の副葬用の空間に、鎌先を南に向けて置かれていた(第2図)。

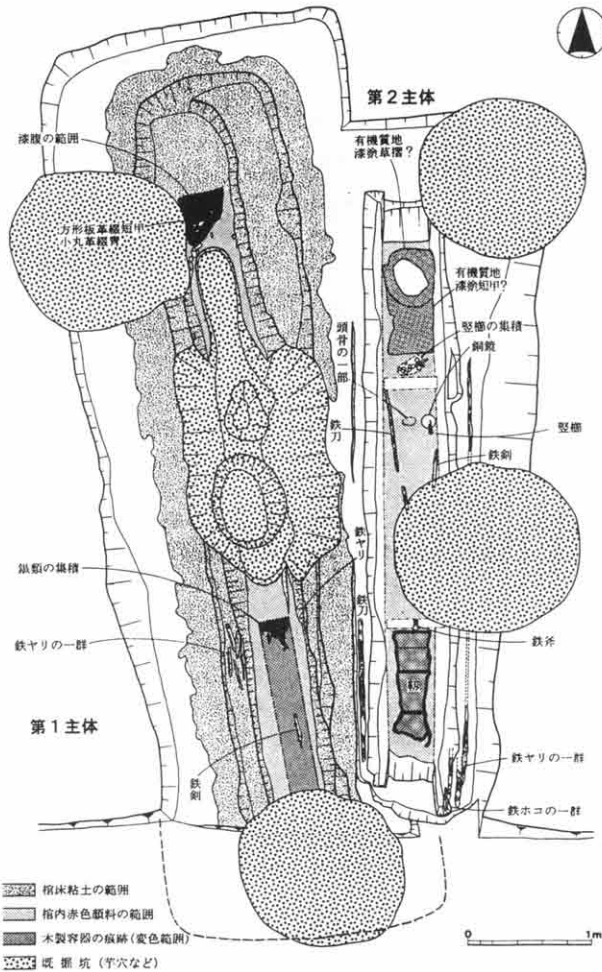
靱は、土圧で押し潰されていたが、副葬当初に近い状態で出土した(第3図、検出長約90cm・検出幅約28cm)。その全形は、両側端のやや内側に山状の隆起が縦方向に平行してみられることから、その部分を頂点とする断面が長方形(あるいは隅丸長方形)の、やや裾広がり呈する筒状容器と想定され、蓋・矢筒部・底部の3つの部分から構成される。ただし靱形埴輪や他の出土例にみられる背負板・背当ては出土していない。これより本来の靱(矢筒部+底部)の大きさは、全長約84cm・幅約19cmに復原でき、実測面(以下表面と呼ぶ)を副葬当初から上にしていただと考えられる。

靱内には、鉄鎌41点、銅鎌1点が納められていたが、いずれの鎌もその切先を上向きに挿入されていた。

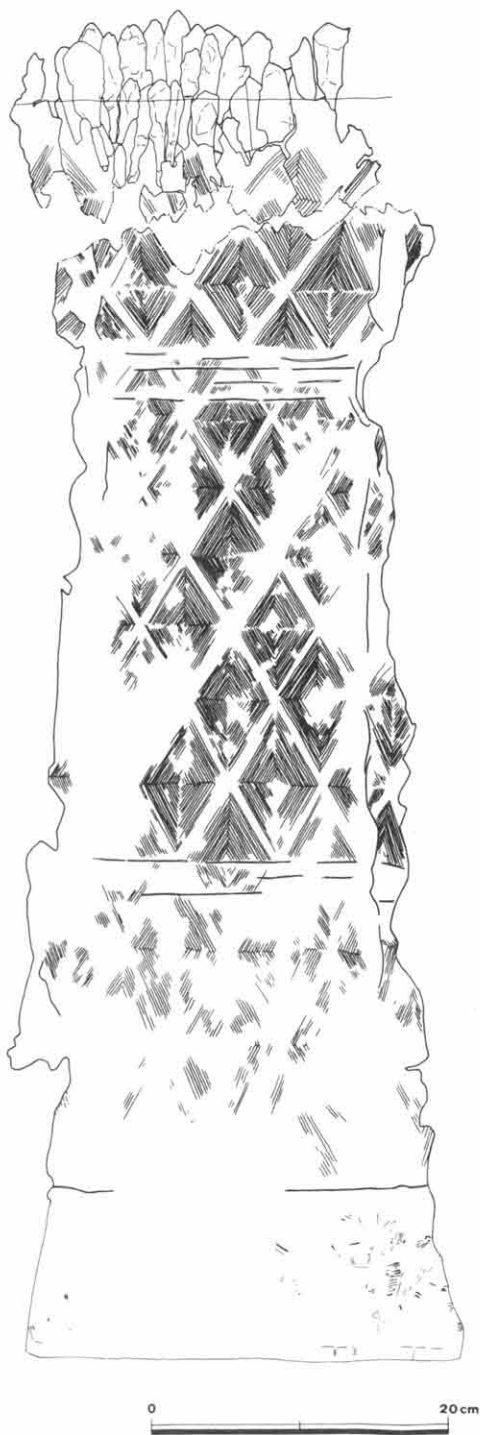
## 3. 靱の概要—表面・断面観察成果より—

はじめにも述べたように靱は現在、整理中であるため、おもに表面観察しか行うことはできなかったが、以下にその概要を述べていく。

靱はほぼその全容を知ることができるが、遺存している



第2図 瓦谷古墳墳頂部平面図(注3文献より)



第3図 鞞平面図(出土状況、上側の糸のみ表現)

のは全面に塗布されていた漆の膜に限られる。このうち、矢筒部は漆膜に毛穴や短い毛が認められることから、革を下地としていたと考えられ、蓋・底部は漆膜の状態や他の出土例から木製であったと考えられる。なお、裏面は口縁部分に限り観察しており、その結果から表面と特に異なる点はないようである。

革を下地とする矢筒部は、表面に特異な菱形文を表現する。菱形文は直径0.2～0.3mmの糸と幅約5mmの帯状の革製品(?)を組み合わせることによって構成されており、糸を斜交するように配置した後、帯状の革製品(?)で個々の菱形文を強調するという方法でつくられている。また、後述するように、文様の製作中も含めて数回にわたって漆を塗布している。文様を構成する糸は、帯に平行する糸がこれに斜交する糸すべてに対して、常に上糸となるように配置される。この糸の上下関係は菱形文の対角線上で逆転する。菱形文は、糸の配置状況から菱形の対角線と帯によって囲まれた三角形を1単位としているので、1個の菱形文はそれら4単位から構成される。また、1単位当たりの糸の本数は、上下それぞれ16～18本ずつである(第4図)。

以上から、この文様は通常の織物ではなく、むしろ糸を1本1本編み上げるような方法でつくられたと考えられる。

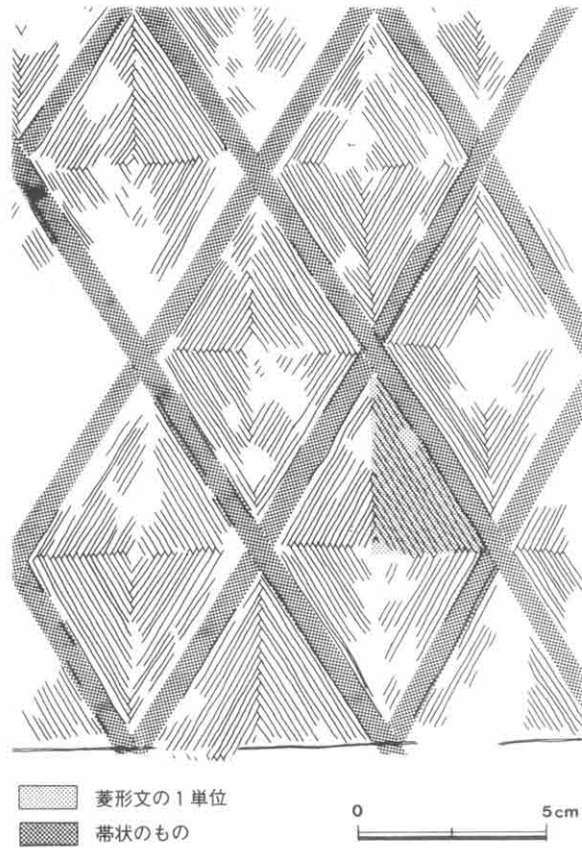
こうした菱形文の上には、鞞の形を整えるために横方向の帯が2か所に取り付



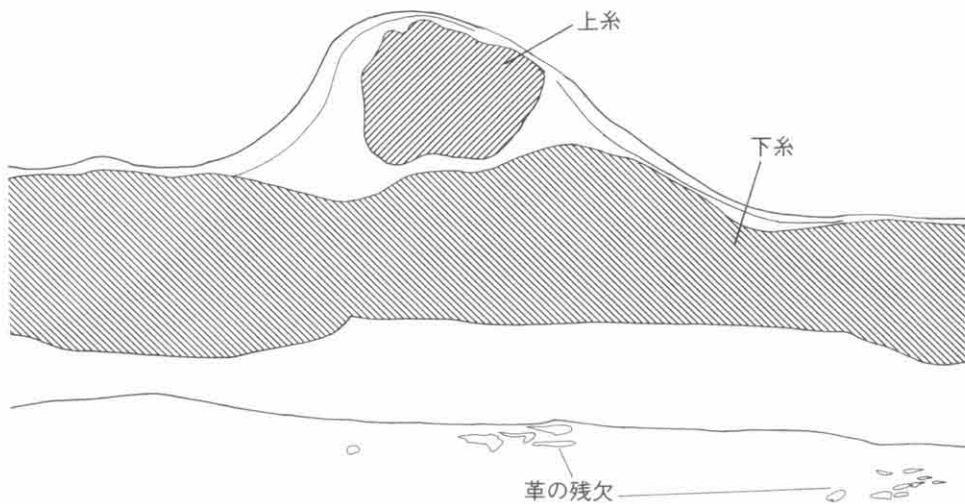
けられている。これは幅約1cmの带状製品を2～3本巻きつけていたと考えられる。ただし、検出時・整理時の剥落が激しく、どのような材質のものが使用されていたかは不明である。口縁部分は、特別な補強を施さず、口縁端部に横方向の糸状のものがみられるのみで、菱形文を構成する糸との接合方法などは不明である。

蓋・底部については、両者ともその存在は確認できるが、遺存状態が悪く、その構造などは明らかでない。なお、底部には何らかの彫刻が施されていたと思われる。

以上の表面観察の成果に加えて、今回、漆膜の断面写真による検討<sup>(注4)</sup>を行った。断面写真から明らかになった点は主に次の2点である。第一に、すでに述べた糸の上



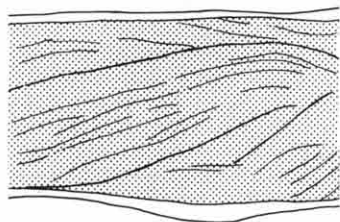
第4図 菱形文の拡大図(上糸のみ表現)



第5図 糸の上下関係(写真からトレース)



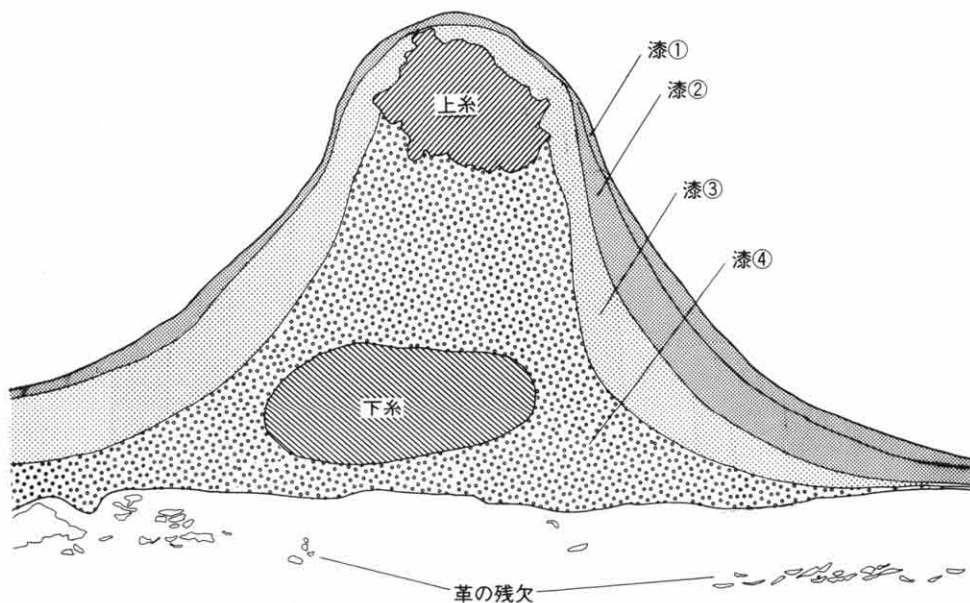
下関係が明瞭に示されるとともに(第5図)、菱形文を構成する糸のよりの痕跡を確認した(第6図)。ただし、糸の種類を特定することはできなかった。第二に、革や編物の上に塗布された漆の回数を知ることができた(第7図)。すなわち瓦谷古墳出土の鞆の場合、少なくとも4回、漆が塗られていることが確認できる。このうち漆①②は純粋な漆を使用し、漆③は炭粉を混ぜた漆を使用したと考えられる。以上の3つはほぼ確実に糸(編物)の上に塗られている。漆④は何を混ぜたか不明であるが、糸(編物)の下に塗られているので糸(編物)と革の接着剤の役割を果たしていたと考えられる。



第6図 糸のよりの痕跡  
(写真からトレース)

#### 4. 製作技法の類似性—雪野山古墳棺内出土鞆との比較—

ここ数年、漆塗鞆が相次いで出土おり、特に滋賀県雪野山古墳の竪穴式石槨舟形木棺内出土の鞆は遺存状態が良好であった(第8図)ほか、瓦谷古墳出土の鞆と類似性が指摘できる点で注目される。なかでも文様の類似は著しく、雪野山古墳出土の鞆の菱形文の製作方法は、瓦谷古墳出土の鞆と同様の特徴を有し、同一の製作技法の影響下にあることがうかがえる。ただ、両古墳の鞆の菱形の大きさはそれほど変わらないのに、瓦



第7図 漆の塗布状況(写真からトレース)

谷古墳出土の鞆に比べ菱形文を構成する糸がやや太い。そのため、1単位あたりに必要な糸の本数が、雪野山古墳出土の鞆では10本前後となる。また、個々の菱形文を強調するために帯状の製品を使用せず、さらに太い糸を使用する。このような文様にみられる特徴のほか、菱形文の配置方法も同じ点は重要である。すなわち、雪野山古墳出土の鞆の復原案では矢筒長が7個分、幅が3個分、厚さが1個分の菱形文がみられるが、このような菱形文の配置は瓦谷古墳出土の鞆も全く同じである。

雪野山古墳出土の鞆は背負板を伴うが、瓦谷古墳出土の鞆はそうした背負板あるいは背当てを伴わない。また、背当てを伴う場合にしばしばみられる矢筒部の紐通穴もみられなかった。紐通穴が一般に背当てを鞆に固定するために使用されたとするならば、両者をとともにもたない瓦谷古墳出土の鞆は、当初からこうしたものをもたない鞆であったと考えるのが妥当である。このことは、両古墳の鞆が同一の製作技法の影響下にありながらも、それぞれに異なった技法あるいは様式が存在したことを示す。ただし、これが時間差によるものか、地域差によるものかは不明である。なお、瓦谷古墳出土の鞆は、背負板をもたない代わりに蓋をもつ点が特徴的である。

こうした鞆どうしの類似性は、これまでの調査成果からいくつかの古墳の間でも指摘できる。たとえば雪野山古墳棺内出土例と韓国大成洞14号墳例、雪野山古墳棺外出土例と福島県会津大塚山古墳南棺出土例などで、文様あるいは鞆の製作技法の類似性が指摘できる。

しかし、蓋をもつ鞆と背当てをもつ鞆の関係、あるいは背当ての有無による違いなど、形態に関する問題点は今後の課題として検討していかなければならない。

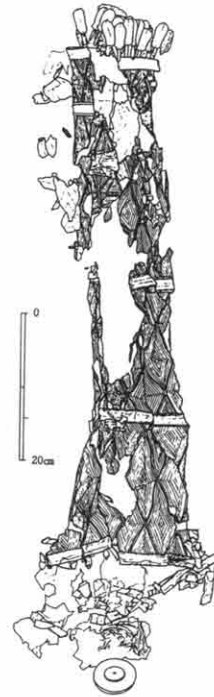
## 5. まとめ

以上の成果について筆者の考えを述べて小稿のまとめとしたい。

瓦谷古墳出土の鞆の表面・断面観察からは以下の点が指摘できる。

1) 菱形文を構成する糸の本数や上下関係・鞆の形態などから、文様は編み上げてつくられたと考えられる。したがって、あのような精緻な文様を崩さずに製作するには、あらかじめ革の上で編み上げた可能性がある。

2) 製作工程を部分的ではあるが明らかにすることができた。すなわち革の上に漆④、糸(編物)、漆③、②、①の順で塗布あるいは配置されたと考えられる。この場合、下地と



第8図 雪野山古墳  
棺内出土の鞆

なる革と糸(編物)を接着するために塗られた漆④が、どのような方法で革と糸(編物)の間に塗られたかが問題となる。なお、①・②は純粋な漆を使用しているので仕上げに用いられたと考えられる。

今回、以上のような成果を得たが、鞆の製作技法を十分に明らかにできたとは言い難い。次に雪野山古墳との類似性からは以下の点が指摘できる。

3)前節で詳しく触れたように瓦谷古墳出土例と雪野山古墳出土例とは、特に文様の類似という点で同一の製作技法のグループとして捉えることができる。たとえば上記で触れた古墳は、瓦谷古墳出土例や雪野山古墳棺内出土例を代表とするグループ(菱形文を採用)と会津大塚山古墳南棺出土例を代表とするグループ(通常の織物を使用)に分けられることが指摘されている。このグルーピングは、製作技法の違いによるものであるが、付表に示した鞆の大半はこれらのグループとは異なる形態・文様をしており、複数の製作技法のグループが存在したと考えられる。

4)しかもこのように類似した鞆が遠く離れた古墳から出土するということは、「鞆」を配布するような行為が行われたことを示すのではないか、しかも、こうした配布行為を行うためには、「鞆」を専門的に製作するような集団が存在したと考えられる。これらの製作集団は当然のことながら中央=ヤマト政権によって統制された集団であった可能性が

付表 鞆の出土一覧表

古墳名	所在地	個体数	鞆の材質	時期	参考文献
下小松98号墳	山形県	1	木製漆塗(1)	後期中葉	現説資料(1991)
会津大塚山古墳	福島県	2	織物製漆塗(2)	前期後葉	『会津大塚山古墳』(1964)
前橋天神山古墳	群馬県	3	不明(3)	前期後葉	『群馬県史』資料編3(1981)
大塚塚古墳	栃木県	1	革製漆塗(1)	中期初頭	『山王寺大塚塚古墳』(1977)
国分尼塚1号墳	石川県	1	織物製漆塗(1)	前期中葉	現説資料(1984)
鼓山古墳	福井県	2	織物製漆塗(2)	前期末葉	『鼓山古墳発掘調査報告』(1965)
石山古墳	三重県	1	革製漆塗(1)	前期後葉	『図解考古学辞典』(1959)
雪野山古墳	滋賀県	2	革製漆塗(1) 織物製漆塗(1)	前期中葉 前期中葉	『雪野山古墳』(1990) 『雪野山古墳Ⅱ』(1992)
波路古墳	京都府	1	織物製漆塗(1)	前期前葉	『波路古墳・波路城跡・荒神社跡』(1988)
園部垣内古墳	京都府	1	革製漆塗(1)	前期後葉	『園部垣内古墳』(1990)
瓦谷古墳	京都府	1	革製漆塗(1)	前期後葉	『京都府遺跡調査概報』第46冊(1991)
西山塚古墳	京都府	2	革製漆塗(2)	中期後葉	現説資料(1992)
土保山古墳	大阪府	4	革製漆塗(4)	中期中葉	『土保山古墳発掘調査概報』(1960)
亀井古墳	大阪府	1	革製漆塗(1)	中期中葉	『亀井・城山』(1980)
備前車塚古墳	岡山県	1	不明	前期初頭	『岡山県史』考古資料(1986)
大迫山1号墳	広島県	2	革製漆塗(2)	前期中葉	『大佐古山第1号墳発掘調査概報』(1989)
琵琶隈古墳	福岡県	1	織物製漆塗(1)	中期?	『日本考古学年報』8(1959)
大成洞14号墳	大韓民国	1	革製漆塗(1)	中期前葉	読売新聞(1992.7.4付)

高い。特に、製作集団の存在に関連して『新撰姓氏録』に河内国の未定雑姓として「靱編首」という氏族名がみえていることは注意すべきであろう<sup>(注10)</sup>。

以上のことから、「靱」を製作した集団が、しかも複数存在したことはほぼ認めてよいと思われる。もちろん、これまでの出土例のすべてがヤマト政権のもとに統制・製作されたのではなく、各地で製作されたものも含まれていると考えられる。しかし、ヤマト政権の統制によって製作された「靱」を、各地の首長が入手していったことは、古墳時代前期の他の副葬品の性格から考えて、あながち否定できないと思われる。

今回、瓦谷古墳出土の靱及び類似性の著しい雪野山古墳棺内出土の靱を取り上げて検討を行ったが、今後の課題として、①個々の技法を明らかにし靱の製作技法の分類を行うこと、②靱の時間的あるいは地域的变化を明らかにすること、③ヤマト政権から配布された可能性のある靱が、いかなる性格を持っていたのかということ、の3点に要約できる。同時に古墳に副葬された「靱」の実用性・祭祀的性格なども問題となるであろう。筆者は特に靱の実用性・祭祀的性格性などの諸点について、従来の考え方に疑問をもっている。今後の資料の増加を待った上で、上記の諸問題について改めて検討することにしたい。

なお、小稿をなすにあたり以下の方々にお世話になった。文末であるが感謝の意を表する。

石井清司・伊賀高弘・橋本清一・工楽善通・福永伸哉・北條芳隆・杉井 健・中川正人  
(敬称略・順不同)

(つつい・たかふみ＝当センター調査第2課調査第3係調査員)

- 注1 出土例については、特に大阪大学大学院生杉井 健氏より多くの御教示を得た。また、付表にあげたほかに、靱そのものは遺存していなかったものの、鏝の集積状況から靱に納められていた可能性のあるものについて、川西宏幸氏が集成されている(『儀仗の矢鏝』『考古学雑誌』第76巻第2号 1990)
- 注2 靱の取上・整理・保存作業については京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏の指導を受けた。
- 注3 「京都府木津町瓦谷古墳の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第38号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990  
「木津地区所在遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注4 断面写真の撮影は奈良国立文化財研究所の工楽善通氏に依頼した。また、漆の混ぜ物についても御教示を得た。
- 注5 杉井 健氏によって詳細な報告がなされている(『滋賀県雪野山古墳棺内出土の靱』『考古学研究』第38巻第2号 1991)。また、『雪野山古墳Ⅱ』(1992)に鮮明なカラー写真が公表されている。なお、雪野山古墳出土の靱の実見に際しては滋賀県埋蔵文化財センターの中川正人氏のお世話になった。
- 注6 1992年1月の考古学研究会関西例会においてその復原案が提示された。
- 注7 1992年7月4日付読売新聞を参照。
- 注8 『雪野山古墳Ⅱ』(1992) p.22
- 注9 注6の復原案と同時に提示された。
- 注10 このことはすでに小林行雄氏によって指摘されている(『続古代の技術』 p.186 1964)。

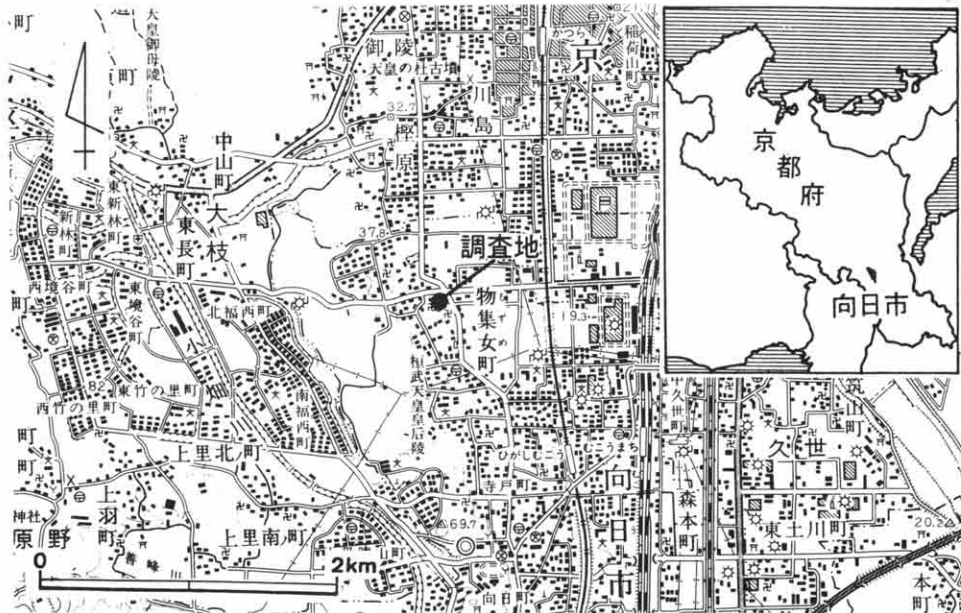
## 中海道遺跡の再検討(1)

中川 和哉

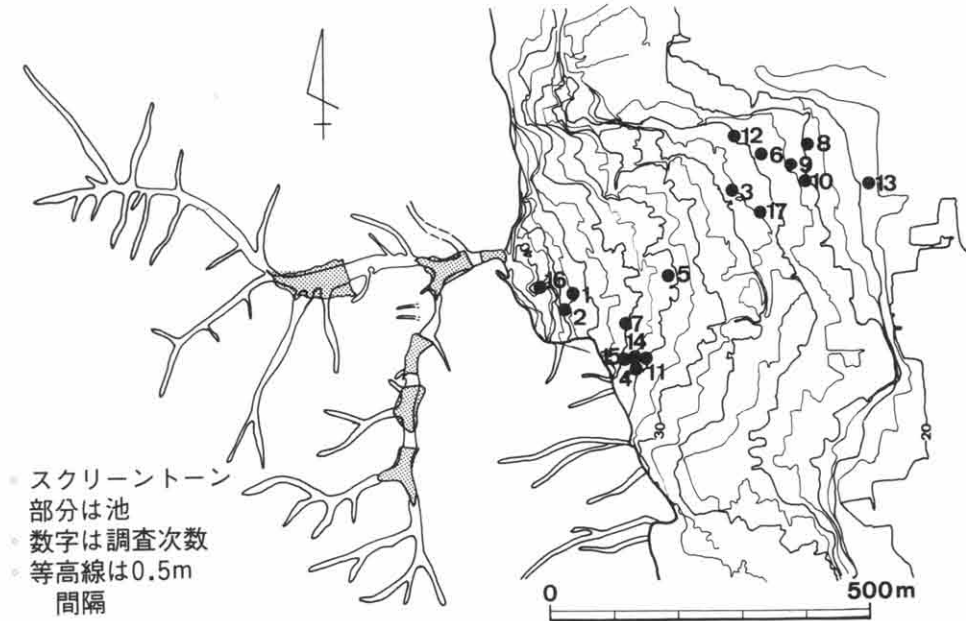
### 1. はじめに

中海道遺跡第17次調査<sup>(註1)</sup>は、平成元年11月20日から平成2年2月15日まで実施された。調査地は、京都府向日市物集女町御所海道に位置する。遺跡は、第2図で見られるように標高90m前後の向日町丘陵から流出した土砂によって形成された、扇状地上に立地している。

中海道遺跡のある物集女地区は、比較的多く調査が実施された地区で、縄文時代以前から人々が住みだした形跡が認められる。弥生時代には、中期から後期の遺物が認められる。第1次調査では、溝の中から弥生時代末あるいは、庄内期の良好な一括土器資料が出土した。古墳時代には、須恵器出現期前後の集落が認められる。17次調査地に隣接する第3次調査地では、韓式土器を持つ竪穴式住居が検出されている。向日市は、元稲荷古墳をはじめとする前期古墳の多く分布する地域であるが、物集女地区では前期の古墳が今のところ発見されていない。中期に造られた南条3号墳からは、初期須恵器(TK73)や埴輪が採集



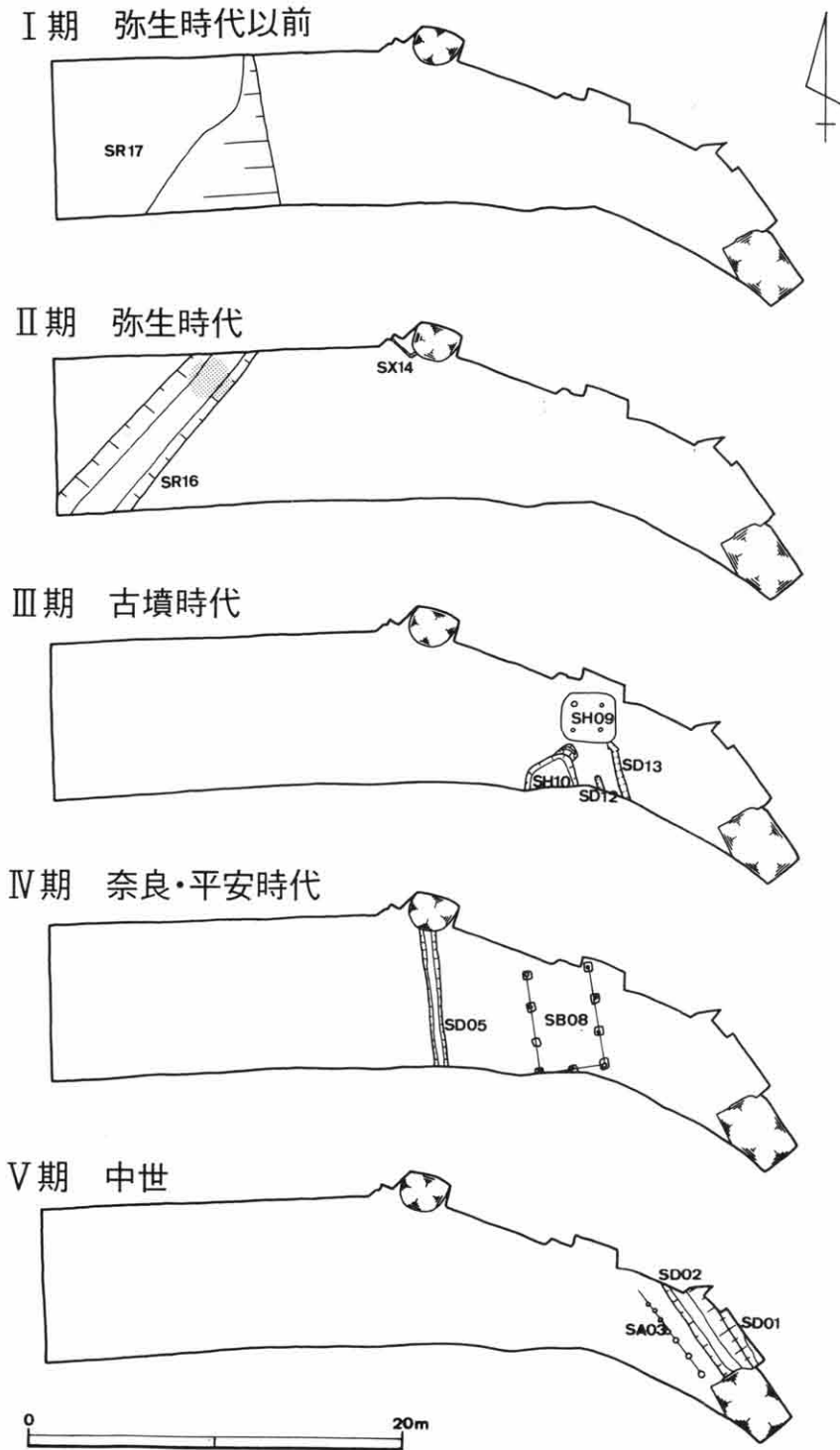
第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 中海道遺跡地形等高線図(原図中塚 良氏提供)  
\*数字は調査次数と対応する。

されている。また、現在桓武天皇皇后高島陵として宮内庁に管理されている古墳は、直径65mの2段築成の中期の大円墳と想定できる。後期古墳には、全長45mの前方後円墳である物集女車塚古墳が存在する。主体部は横穴式石室で石棺が安置されていた。現存はしないが、物集女地域の丘陵斜面には群集墳が多く存在していたと伝えられる。わずかに残された凝灰岩の石棺片や、陶棺片が破壊された古墳の存在を傍証している。この地域には古道と考えられる物集女街道が通っている。長岡京期には京外となるが、物集女街道は京の北辺につながる重要な幹道となっていたと想定できる。17次調査地の付近で物集女街道が複雑に屈曲することから、本来の物集女街道のルートが問題となる。奈良・平安時代の大規模建物はこれまでのところ発見されていないが、広く軒瓦や緑釉陶器の分布が認められる。御所海道の来迎寺に残る『光勝寺縁起略』によれば、弘仁9(818)年に嵯峨天皇によって光勝寺がこの地域に建立されたと伝えられる。丘陵部は平安時代埋葬地として利用された。桓武天皇皇后乙牟漏の高島陵、唐代の双鸞宝馬六花鏡が出土した、平安時代前期の長野古墓がこの地域に造られる。中世には、土豪物集女氏の城館である物集女城が造られた。現在、土塁と濠が残存している。

今回は、概報刊行以後進んだ整理事業の結果、新たに図化できた資料を中心に3回に分けて提示し、若干の考察を行いたい。



第3図 遺構変遷図

## 2. 遺構と遺物

第17次調査は、古道である物集女街道に近接し、複数の時期の遺構・遺物が認められた。遺構には、大きく分けて5つの時期が認められた。Ⅰ期は、弥生時代以前の時期に比定できる。Ⅱ期は、弥生時代後期末。Ⅲ期は、古墳時代。Ⅳ期は、奈良・平安時代。Ⅴ期は、中世である。以下Ⅰ期から順に見ていきたい。また、包含層からの遺物等も合わせて提示したい。

### A. Ⅰ期(弥生時代以前)

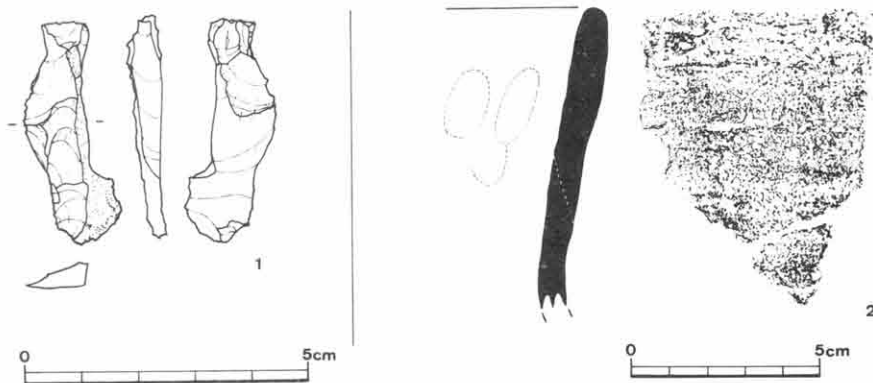
#### a. 遺構

自然流路S R 17 トレンチ西部で流路の東肩のみを発見した、大阪層群と考えられる締まった黄褐色シルトを削り込み堆積した流路である。流路の断面は礫、砂、シルトが互層を呈する堆積状態を示す。最下層の礫層は、堆積物の検証からN18.5°Wに流れていたものと考えられる。

#### b. 遺物

1は、S R 17の最下層に堆積した礫層中から出土したサヌカイト製の石器で、層位的には調査地内で出土した遺物の中でもっとも古い遺物となる。石器の背面には自然面を残し、打撃方向が対向する剥離面が認められる。背面は大きなバルバスカがあり、リングの形状と切り合いから、破損していることがわかる。剥片の側面に認められる主要剥離面上方からの剥離面は、主要剥離面形成時に同時にできたと想定できる。これらのことから、楔形石器の削片と考えられる。最大長4.0cm・最大幅1.2cm・最大厚0.6cm。

2は、弥生時代の流路であるS R 16埋土中より出土した縄文土器である。土器片は全体的にやや摩滅しており、原位置からは遊離している。縄文時代晩期前半と考えられる粗製の深鉢である。外面には巻き貝によると思われる条痕、内面には指頭圧痕が認められる。



第4図 縄文時代遺物実測図



胎土中には径5mm前後の長石・石英と雲母片を多く含む。砂粒の多くがほとんど円摩されていなく、鈹物組成から花崗岩地域から当遺跡に運ばれたものと想定できる。

## B. II期(弥生時代後期)

### a. 遺構

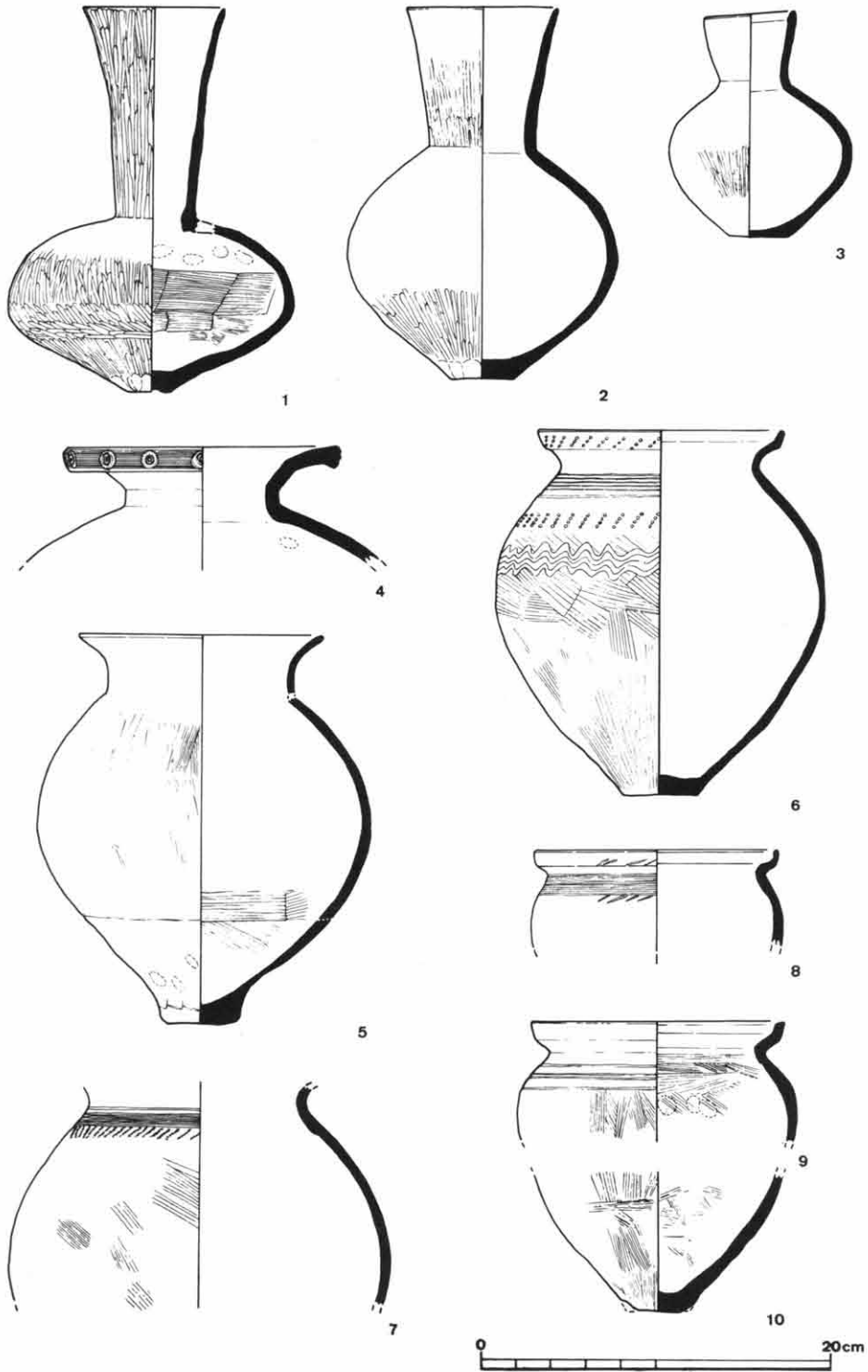
自然流路S R 16 S R 17を開析して形成された流路である。埋土は、礫、砂、シルトの互層である。流路内からは、第3図にスクリーンで示した範囲に、完形の土器群が集中して出土した。出土層位から、S R 16が堆積しはじめてしばらくして、一括投棄されたものと考えられる。

S X 14 トレンチ内で角のみを検出した遺構で、遺構検出面からの深さは20cmである。近接する第3次調査では、住居跡が検出されていることから、住居跡の可能性も指摘できる。

### b. 遺物(一部弥生時代中期の遺物も合わせて収録する)

第5・6図は、ほとんどがS R 16から完形の状態で出土した土器群である。1は玉葱状の平たい体部を持つ細頸壺である。外面は肩部上方の調整は肉眼観察では不明であるが、全面にヘラ磨きによると考えられる。2・3は、長頸壺である。外部調整は部分的にヘラ磨きが認められる。恐らく全面に施されていたものと考えられる。内面の調整は双方ともに完形品であるため不明である。2は、体部に胎土が赤色と淡茶褐色の縞状になる部分があり、2色の粘土が混ぜられていると考えられる。4は、広口壺である。円形浮文と擬凹線で加飾された口縁部は完存している。同一個体と考えられる体部破片も多く存在するが、接合できなかった。体部内面には指頭圧痕と考えられるが、調整は不明である。他の土器に比べ若干高い位置から出土しているが、同一個体と考えられる土器片数点が完形土器と同じ層準で出土している。5は、分割成形によって造られた甕である。胎土の素地がS R 16出土の他の土器とは異なる。4・5は、胎土中の素地や色調が他の土器とは著しく異なるが、含有鈹物は在地のものと考えられる。6～9は、受け口状口縁を持ついわゆる近江型の甕である。胎土中に含まれる砂粒には、円摩度の高いチャート、石英、長石とともに、乙訓地域の土器の胎土に多く認められる赤色斑粒が含まれることから、在地の土器とみなされる。9・10は、接点は認められないが、同一個体と考えられる。

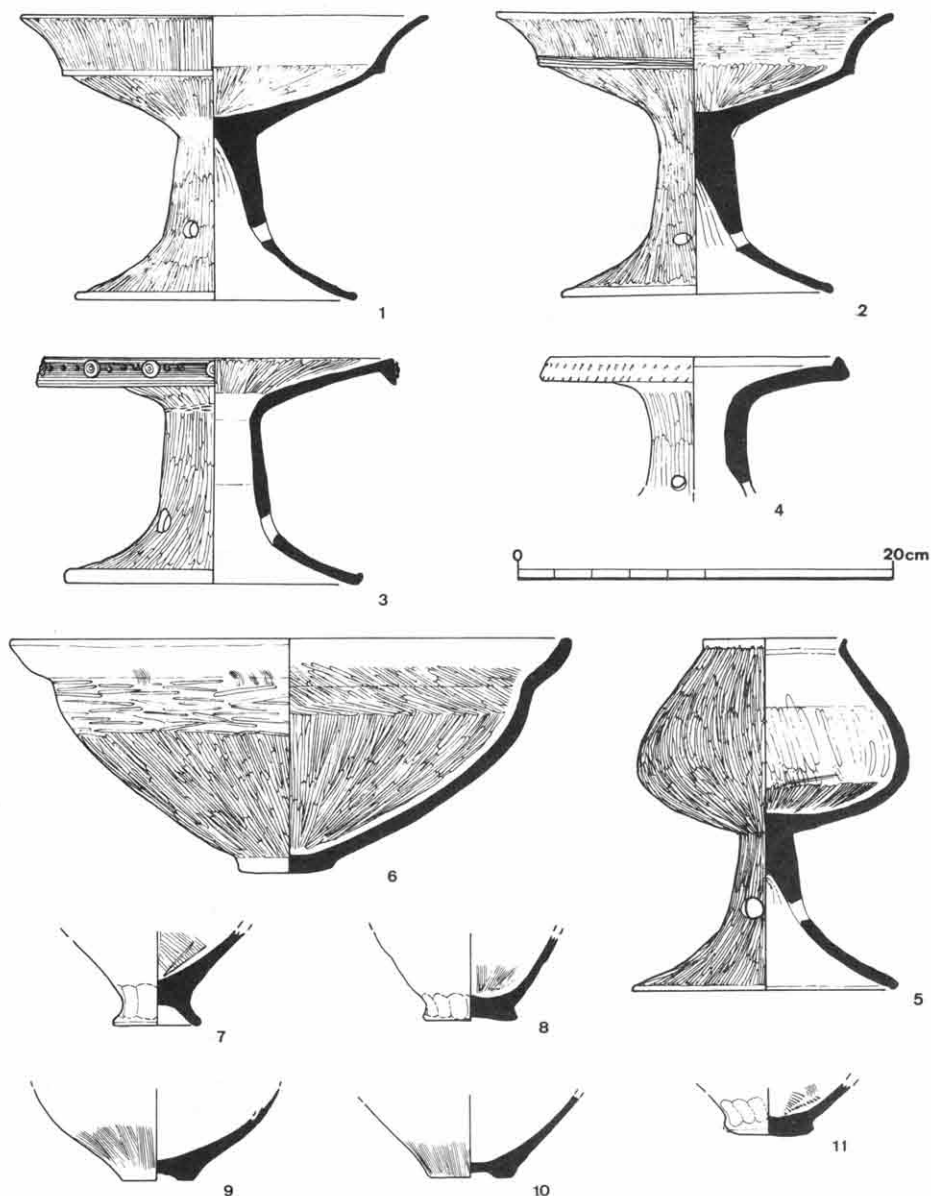
第6図の1・2は、分量及び調整技法がほぼ等しい高杯である。2は、杯部外面の屈曲部に2本の沈線がめぐる。3・4は、筒状の脚部を持つ器台である。3は、受け部端部が垂下し、円形浮文、刺突、擬凹線によって加飾されており、穿孔は3方向に認められる。4は、端部が上方に延び、刺突によって加飾されている。刺突は上下2列であるが、上下同時に1つの工具で施文されたものである。脚部外面にはヘラ磨きの痕跡が認められるが、



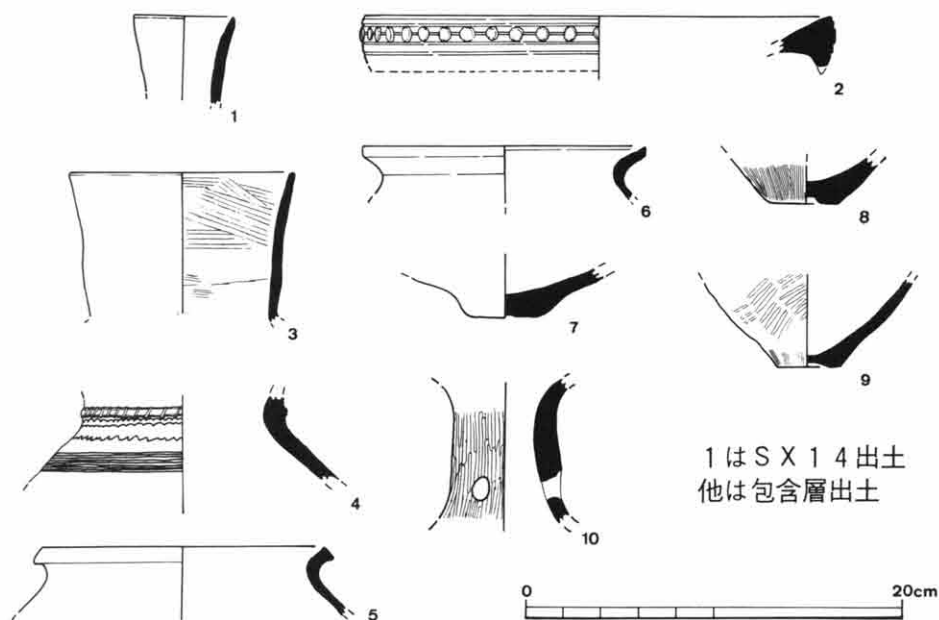
第5図 S R 16出土遺物実測図(1)

他の完形率の高い土器に比べ器面の遺存状態が悪い。脚部には3方向の穿孔が認められる。  
5は、台付き無頸壺である。外面は、ていねいなヘラ磨きによって器面調整が施される。  
脚部は3方向に穿孔されている。

第7図は、1がS X 14から出土した以外は、すべて包含層から出土した。1は、小型の長頸壺の頸部と考えられる。2は、端部に円形浮文と凹線を施した広口壺である。生駒山西麓と考えられる胎土を持つ。4は、2重口縁を持つと考えられる加飾の壺である。頸部



第6図 S R 16出土遺物実測図(2)



第7図 遺物実測図

には刻み目を入れた突帯がめぐる。体部には凹線と波状文が施されている。5は、弥生時代中期と考えられる甕である。中期の土器は中海道遺跡では初出の資料である。6は、口縁端部を摘み上げた甕で、庄内甕の特徴を持つ。9は、体部外面にタタキによる調整の認められる甕である。タタキのある土器片は包含層からのみ出土している。完存する筒状の器台の脚部である。SR16出土の器台と似る。

(なかがわ・かずや=当センター調査第2課調査第4係調査員)

注1 高橋美久二・金村允人・森 毅「中海道遺跡発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第7集 向日市教育委員会 1981年)、國下多美樹「中海道遺跡第3次(3NNANK-3地区)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第13集 向日市教育委員会 1984年)、中川和哉「中海道遺跡第17次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990年)

注2 SR17最下層礫層中例をサンプリングし、礫面の傾斜の検証から流れの方向を復原。サンプリング及び計算は中塚 良氏にお願いした。

\*向日市埋蔵文化財センターの中塚 良氏には中海道遺跡地形等高線図の提供と周辺地形に関するご助言をいただいた。

付表1 土器観察表(1)

\*チ;チャート 石;石英 長;長石 雲;雲母 赤;赤色斑粒 カ;カクセン石  
 \*粒度・数字は含有鉱物の最大なもの、()内は主体を含めるものの大きさを示す。

種 類	図 番 号	器 種	法量 (cm)		色調		胎土		調整・手法		焼成	口縁部 残存度	備考
			口径・残存高 ( ) : 残高		外面 内面	素質、含有鉱物 (粒度/種類)	外面 内面						
弥 生 土 器	1	壺	8.0 22.0	明茶褐色 淡茶褐色	緻密、2(2) チ・石・長・赤	ミガキ ハケ、ナデ	硬	完存					
	2	壺	8.6 21.3	明橙褐色 淡茶褐色	緻密、5(2) チ・石・長	ミガキ 不明	やや軟	完存	黒斑				
	3	壺	5.0 13.0	明橙褐色 暗灰色	緻密、3(2) チ・石・長・赤	ミガキ 不明	やや軟	1/8	黒斑				
	4	壺	15.7 (6.6)	橙褐色 橙褐色	緻密、6(2) チ・石・長	不明 ユビオサエ	やや軟	完存					
	5	甕	14.1 推定22.0	橙褐色 暗灰色	粗、3(1) チ・石・長・赤	ハケ、ヘラオサエ ハケ	硬	1/4	スス				
	6	甕	14.6 21.0	淡茶褐色 淡茶褐色	やや粗、3(2) チ・石・長・赤	ハケ、ナデ ユビオサエ	やや軟	1/3	スス				
	7	甕	(13.0)	淡茶褐色 淡黒灰褐色	やや粗、6(2) チ・石・長	ハケ 不明	やや軟		スス				
	8	甕	13.9 (5.6)	淡茶褐色 淡茶褐色	緻密、3(2) チ・石・長・赤	ハケ、ナデ ユビオサエ、ナデ	硬	1/4					
	9	甕	9.2 (7.2)	暗茶褐色 暗茶褐色	やや粗、4(2) チ・石・長	ハケ ハケ	やや軟	4/5	スス				
	10	甕	(7.7)	暗茶褐色 暗茶褐色	やや粗、4(2) チ・石・長	ハケ ハケ	やや軟		スス				
弥 生 土 器	1	高 杯	21.5 15.0	明茶褐色 明茶褐色	緻密、3(2) チ・石・長・赤	ミガキ ミガキ、シボリ	やや軟	完存					
	2	高 杯	21.3 14.6	淡茶褐色 淡灰褐色	緻密、1(1) チ・石・長・赤	ミガキ ミガキ、シボリ	硬	完存	黒斑				
	3	器 台	18.9 11.9	淡茶褐色 淡茶褐色	緻密、3(2) チ・石・長・赤	ミガキ ミガキ	硬	完存	赤色				
	4	器 台	15.3 (6.7)	淡茶褐色 淡茶褐色	緻密、5(2) チ・石・長	ミガキ 不明	やや軟	完存					
	5	台 壺	7.6 18.5	明茶褐色 明茶褐色	緻密、2(1) チ・石・長	ミガキ ミガキ、ナデ	硬	完存	赤色				
	6	鉢	30.0 12.3	淡茶褐色 淡茶褐色	緻密、4(2) チ・石・長	ハケ、ミガキ ミガキ	硬	完存	黒斑 赤色				
	7	鉢	(5.6)	淡茶褐色 淡茶褐色	緻密、3(2) チ・石・長・赤	ナデ ハケ	硬						
	8	鉢	(5.6)	暗橙褐色 暗橙褐色	やや粗、6(2) チ・石・長・赤	ナデ ハケ	やや軟		スス				
	9	底 部	(5.2)	淡灰褐色 淡灰褐色	緻密、5(3) チ・石・長・赤	ハケ 不明	やや軟		スス				
	10	底 部	(4.4)	淡茶褐色 淡灰色	やや粗、3(2) チ・石・長・赤	ハケ 不明	硬						
	11	底 部	(2.7)	暗灰褐色 暗灰褐色	緻密、3(2) チ・石・長・赤	ナデ ハケ	硬						

付表2 土器観察表(2)

種類	図番号	器種	法量 (cm) 口径・残存高 ( ) : 残高	色調		胎土	調整・手法		焼成	口縁部 残存度	備考
				外面	内面	素質、含有鉱物 (粒度/種類)	外面	内面			
弥生土器	1	壺	5.4 (4.4)	淡茶褐色 淡茶褐色		緻密、2 (2) チ・石・長	不明 不明		やや軟	完存	
	2	壺	24.7 (2.5)	暗褐色 暗褐色		緻密、4 (1) 石・長・雲・カ	不明 不明		硬	1/10	
	3	壺	11.8 (7.5)	淡茶褐色 淡茶褐色		やや粗、4 (3) チ・石・長・赤	ナデ ハケ		やや軟	1/10	
第7区	4	壺	(6.1)	淡黄褐色 淡黄褐色		やや粗、5 (2) チ・石・長	不明 不明		やや軟		
	5	甕	15.0 (3.5)	淡茶褐色 淡茶褐色		やや粗、5 (2) チ・石・長・赤	不明 不明		硬	1/8	赤色
	6	甕	15.0 (2.5)	淡茶褐色 淡茶褐色		緻密、2 (2) チ・石・長・赤	不明 不明		やや軟	1/8	
	7	底部	(2.5)	淡桃灰色 淡茶褐色		緻密、3 (2) チ・石・長	不明 不明		軟		
	8	底部		暗褐色 淡茶褐色		やや粗3 (2) チ・石・長	ハケ 不明		硬		
	9	底部	(4.6)	暗橙褐色 暗橙褐色		やや粗、3 (2) チ・石・長・雲	タタキ 不明		硬		
	10	器台	(6.9)	暗橙褐色 暗橙褐色		緻密、4 (2) チ・石・長・赤	ミガキ ナデ		硬		

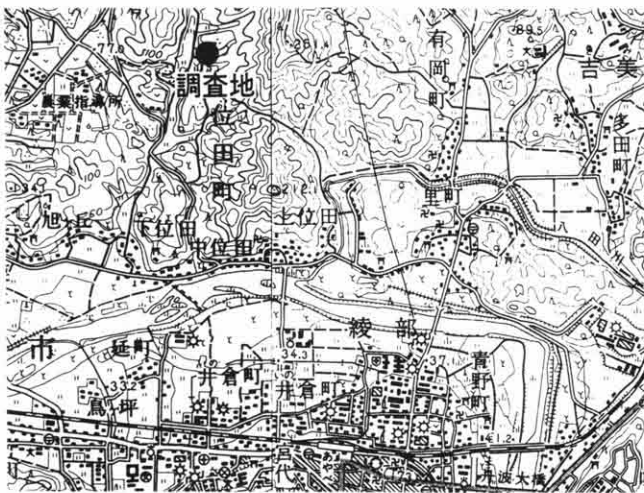
平成4年度発掘調査略報

1. 細谷古墳群

所在地 綾部市位田町大字細谷  
調査期間 平成4年5月18日～同7月4日  
調査面積 約700m<sup>2</sup>

はじめに 細谷古墳群の発掘調査は、公社営畜産基地建設に先立ち、(社)京都府農業開発公社の依頼を受けて実施した。昨年度の第1次調査では、古墳の分布状況を把握する目的で試掘調査を行い、6基を確認した。今年度調査では、新たに3基の古墳を確認し、合計9基の古墳群であることが判明した。調査は、2・6・7・9号墳を(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが行い、5・8号墳と周辺の試掘調査を京都府教育委員会が担当した。

調査概要 6・8号墳は、石材が散乱しているものの、墳丘・石室は完全に削平され、残存していない。2号墳は、南北13m以上・東西7m以上の楕円形の墳丘で、谷部から可視できる南西方で二重の列石を検出した。石室は、無袖の横穴式石室で、全長6.5m・幅1.2mを測る。西側壁はほぼ直立し、東側壁は石室内方へ持ち送っている。7号墳は、石室の石材と土器がわずかに残存している状況で、墳形・規模は不明である。9号墳は、墳丘の北半部が削平され、石室羨門部が残存するにすぎない。墳丘には、三重の列石がめぐり、南



北12m以上・東西6m以上の楕円形墳である。これらの古墳は、墳丘の切り合いから新旧関係があるものの、陶器編年TK209からTK217に築造された可能性が高い。なお、立地条件から細谷古墳群を以久野古墳群の一支群と見ることも検討する必要がある。

(小池 寛)

調査地位置図(1/50,000)

## 2・平安京跡 左京一条二坊十町(堀川会館)

所在地 京都市上京区東堀川下長者町  
 調査期間 平成4年5月6日～同6月29日  
 調査面積 約350m<sup>2</sup>

はじめに 今回の発掘調査は、公立学校共済組合京都宿泊所(京都堀川会館)の増改築に伴い、公立学校共済組合京都支部の依頼を受けて実施した。調査地は、平安京の条坊によると左京一条二坊十町にあたる。現状は京都堀川会館の駐車場となっている。調査地周辺における発掘調査件数は比較的少ないが、(財)京都市埋蔵文化財研究所の試掘・立会調査の結果によると、中世～近世にかけての遺物包含層及び遺構が現地表下約40～150cmの深さで確認されている。しかし、調査地は堀川に面した場所であり、堀川の氾濫によって遺構が残存していないことも予想された。

なお、今回の調査にかかる費用は公立学校共済組合京都支部が全額負担した。

**調査概要** 調査トレンチは、南北2か所に設定した。北側に設けたトレンチを1トレンチ、南側のものを2トレンチとした。はじめに重機により現代の層を除去したのち、人力による掘削に入った。しかし、現在使用中の水道管などの地下埋設物が調査地内を走っていたため、重機掘削にかなりの制約を受けた。1トレンチの遺構の残存が良好な部分では、現地表面から約60cmのところまで遺構を検出した。検出した遺構には掘立柱建物跡2棟・石組井戸5基、土坑・ピットなどがある。この検出面は一部で整地層を切り込んでいる遺構もあるが、大半の遺構は黄褐色粘質土の地山を掘り込んでいた。北半は水道管などの地下埋設物を埋設した際に遺構面が削平されており、石組井戸1基のほかは顕著な遺構は検出できなかった。遺構の所属時期は、大半が18世紀以降であったが、土坑73のみ13世紀後半にさかのぼるものと考えられる。一方、2トレンチは現地表面から約70cmのところまで1トレンチ同様の黄褐色砂質土の安定面を確認した。検出した遺構には掘立柱建物跡・土



調査地位置図(1/50,000)



坑・ピットがある。遺構の所属時期は1トレンチ同様、18世紀後半以降のものが多数であるが、一部の遺構は12～13世紀にさかのぼる。

**出土遺物** 出土遺物には、土器・石器・土製品・石製品などがある。近世の遺構に伴うものとしては、土師器皿・陶器・伏見人形などがある。また、中世の土坑からは比較的残りのよい滑石製の石鍋・手持ち砥石などが出土した。このほか、包含層からは緑釉陶器片・土師器高杯脚など、平安時代の遺物も出土した。

**まとめ** 今回の調査面積はごくわずかではあったが、現地表面から1mほどで地山となることが明らかになった。調査地は堀川の氾濫の及んだ場所と思われたが、ところどころでしっかりとした安定面が存在することが確認できた。今回確認できた遺構は、大半が18世紀以降のもので、中世にさかのぼる遺構がわずかに存在した。これは、平安京のなかでも調査地周辺は比較的微高地状を呈していることが考えられ、今回検出できなかった平安京の遺構は中世以降に削平され、結果として平安時代の遺物が包含層中で採取されるに至ったものと思われる。

(柴 暁彦)

### 3. 大切遺跡

所在地 綴喜郡田辺町大字草内字大切  
調査期間 平成4年5月18日～同6月9日  
調査面積 約280m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、国道307号道路新設改良事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査対象となった大切遺跡は、防賀川小規模河川改修事業に伴う事前の発掘調査が昨年度に行われた結果、新たに発見された遺跡である。防賀川は南山城地域に見られる典型的な天井川で、田辺町内を南北に流れた後、八幡市内を通過して木津川に注ぐ。現在、天井川の盛り土掘り下げ工事が行われており、その際弥生時代中期から古墳時代・中世・近世の



第1図 調査地位置図(1/25,000)

遺物が発見されている。また、昨年度の調査では古墳時代前期の溝や、中・近世の遺物包含層が確認された。

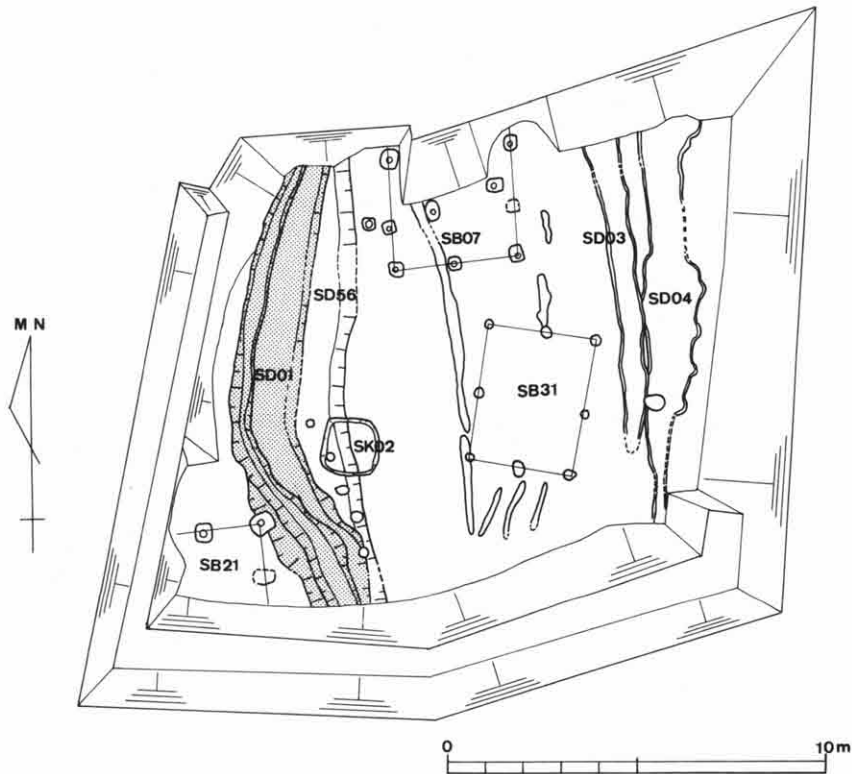
今回の調査地は、防賀川の東岸の天井川の盛り土の裾部にあたる。

**調査概要** 調査地は、調査前には畑として利用されていた。周辺には、天井川付近に竹林や茶畑が見られ、川から離れるにつれて水田が広がる。地形は、北東方向に緩やかに傾斜していく。調査地の標高は、約25.5mである。

土は基本的に、①現在の耕作土、②黄褐色砂礫層、③暗青灰色粘質土層、④黒灰色細砂質土層、⑤緑灰色シルト層、⑥灰色砂礫層の順で堆積している。

②の層は、西側で厚く、東に行くにつれて薄くなる。この層の中には約四枚の水田層が見られ、砂で埋められてはまた水田を作り直しているようすが観察できた。出土遺物は近世の陶磁器片が数片確認できた。また、この層の下部で幅約8m、深さ0.4mの規模の南北の溝を確認でき、現在も伏流水が流れていた。

③の層は、調査地全域で確認でき、中世の水田層と考えられる。出土遺物は瓦器、奈良時代の須恵器、古墳時代の須恵器、土師器などである。



第2図 遺構平面図(1/200)

④の層は調査地の西端と、東端に部分的に広がる。本来は全域に広がっていたと思われるが、中世の水田によって削られた可能性がある。古墳時代の須恵器と土師器が出土した。

⑤の層の上面で多数の遺構を確認した(標高約23.5m)。掘立柱建物跡は3棟確認している。規模はS B31が2間×2間で、他の2棟(S B07・S B21)は、ともに調査地外に広がるため不明である。S B21はS D01が埋まった後に建てられおり、柱穴には、柱の一部が残っていた。S B31は、方向が現在の条里方向とほぼ一致し、埋土も他の2棟とは違うため、時期が新しくなると考えている。S D03・04は、古墳時代後期の浅い溝である。S D03の底には砂が溜まっていて、水が流れていたと考えている。古墳時代後期の須恵器や土師器が出土した。

S D01からは弥生時代の終わりから古墳時代初めにかけての土器(庄内式～布留式)が多数出土した。出土した土器の中には、「S」字状口縁を持つ、東海系と考えられる壺や、河内産の壺が確認でき、他地域との交流がうかがえる搬入品も含まれている。溝の規模は、幅1.5～2m、深さは約0.7m、長さは南も北も調査地外にのびていくため未確認である。全体に円形に曲がっている。埋土は、上層が黒灰色細砂質土、下層が灰色粗砂である。遺物の多くは上層から出土している。

S D56は、S D01の下で確認できた弥生時代中期の溝である。幅は3～4m・深さ約1mほどのもので、埋土は灰色砂礫と粘土の互層である。IV様式の壺が出土した。S D56はかなり水が流れていたようである。この溝がほぼ埋まった後、S D01が掘りなおされたと考えられ、S D56の西肩はS D01によって切られている。

⑥の層は湧水がはげしく、遺物は確認していない。

まとめ 今回の調査では、狭い面積ながら面的な調査ができ、大切遺跡の性格を考えるうえで貴重な資料が多数得られた。

- ・②の層の堆積状況から、近世頃から防賀川の天井川化が急速に進んだと考えられる。
- ・弥生時代から近世に至るまでの遺物出土し、付近に各時期の集落があったことが確認できた。特に、弥生時代から古墳時代にかけては、集落の一部を確認できた。
- ・S D01・56の弥生時代～古墳時代にかけての溝は、遺物が豊富であり、他地域との交流や、当時の生活を考えるうえで貴重な資料が得られた。

今後周辺の調査が進むことにより、この付近の弥生時代～古墳時代の集落の内容・規模などの変化の状況が確認されると思われる。また、防賀川の天井川化の時期やその過程などがさらに明らかにされることが望まれる。

(有井広幸)

## 4. 今 城 跡

所在地 相楽郡山城町大字北河原小字北谷  
 調査期間 平成4年5月6日～同6月12日  
 調査面積 約500m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、府道上狛城陽線建設工事に伴い京都府土木建築部からの依頼を受けて実施した、遺構・遺物の分布密度を把握するための試掘調査である。

今城は、山城国一揆(1485～1493)の時の畠山義就の居城と伝えられ、東西330m・南北400mがその範囲とされている。また、北部には前年度、当調査研究センターによって発掘調査された堂ノ上遺跡、そして、この丘陵の頂上には、平尾城山古墳という著名な前期古墳(全長110m)が存在する。

調査概要 今城跡の発掘前の地形は、北部から水田に近いやや傾斜をもった低地、その南には、舌状に張り出した台地(竹林)、最南部は、かなり傾斜のある茶畑の三区に大きく分割することができる。山城町教育委員会が行った分布調査で、弥生時代V様式の分布が知られていたが、調査を行うと、北部のトレンチは遺物の数量が少なく、近現代の遺物が多かった。台地状の竹林に3トレンチを開けたが遺物はなく、土層は調査地の横を流れる鳴子川に多く見られる砂状がすべてで、平坦な堆積を示す断面であるが、遺構の検出はできなかった。茶畑からの遺物のうち、瓦片が多量に出土したことが注目される。この瓦片は奈良時代のものであるが、過去の踏査結果から、寺院や役所というよりも、瓦窯跡が調



調査地位置図(1/50,000)

査地の近隣に存在するのではないかと考えられる資料である。窯の存在を直接的に示す焼土、炭、灰などは全く見られず、瓦片の中にも窯跡出土に特有の歪んだ製品も見られないが、現在JRが通っている丘陵斜面あたりに奈良時代の窯があった可能性が高いと言えよう。本調査の目的である今城跡の遺物はほとんど出土しなかった。したがって、この城跡についての新たな知見はなく、今後の調査の結果を待つしかない。(森正哲次)

## 研究ノート

## 丹後の製鉄遺跡

増田 孝彦

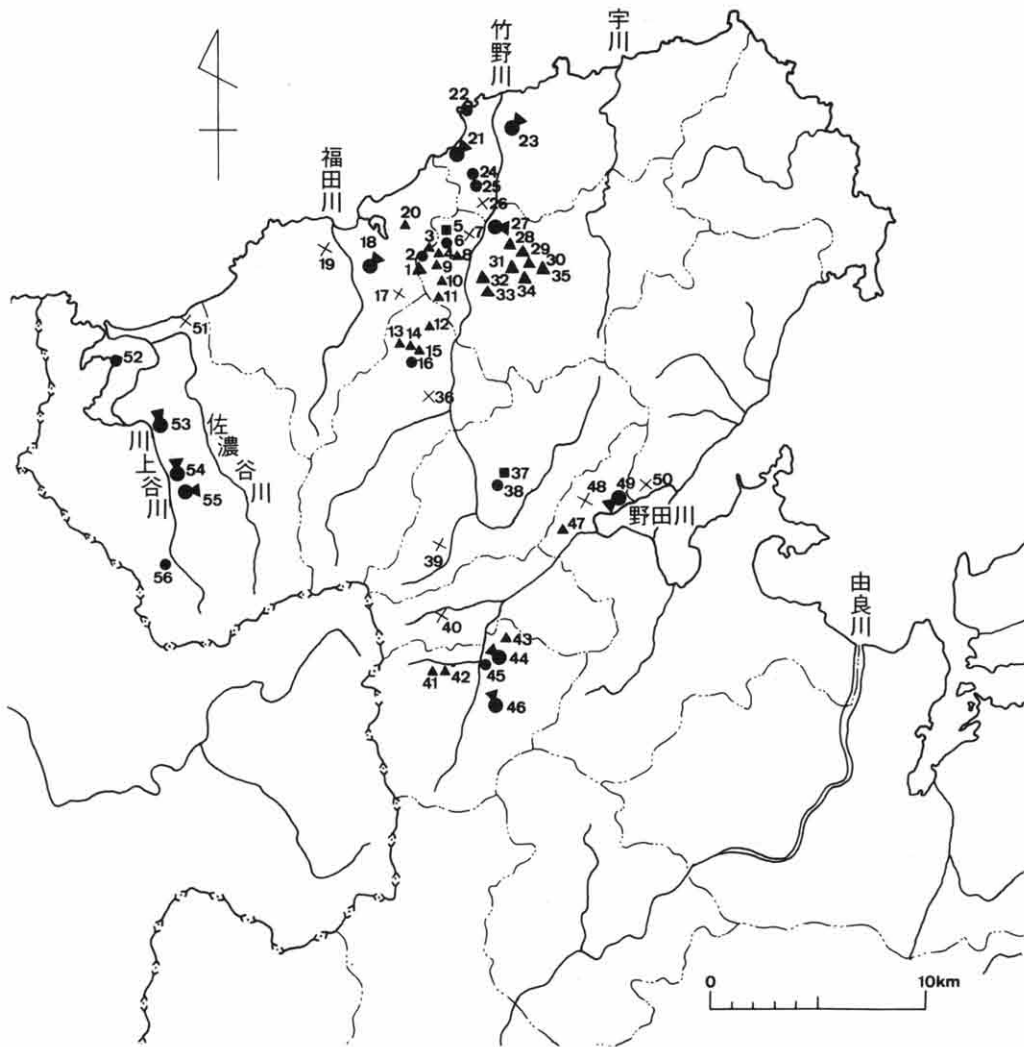
## 1. はじめに

1989年以降の遠所遺跡群の発掘調査を契機として、丹後でも多くの製鉄遺跡が存在することが明らかとなってきた。しかし、丹後では近世以前に鉄生産を行っていたという記録、伝承も残っておらず、不明な点が多い。そのような中で、確認された製鉄遺跡・製鉄関連遺跡は、丹後全体で約41か所にもものぼる。これらのうち、明らかに近世と思われるものを除くと、約35か所が古代の製鉄遺跡となるが、中世と考えられるものも若干含まれる。

最近の古墳の調査では、製鉄に関連した遺物が副葬・供献されるという事例が増加しつつあり、丹後の古代製鉄と古墳とは密接な関係があるように思える。丹後には約5,000基の古墳が存在するとされているが、その大半は後期古墳で占められ、前期・中期古墳は少ない。前期・中期の古墳には、大量の武器類が副葬されるが、後期古墳になると、刀剣類は少なく小型の武器類や農工具が副葬される。1基あたりの鉄製品の保有量はそれほど多くはないが、後期古墳の絶対数が多いため副葬された鉄の量は莫大な量にのぼる。そして、これらの鉄をまかなうには、相当数の製鉄遺跡がなければならないことに気がつく。

また、遠所遺跡群出土鉄滓や砂鉄、丹後半島内の遺跡・古墳より出土した鉄滓の冶金学的分析を行った結果、出土した鉄滓は砂鉄が原料で、いずれも二酸化チタンの含有量が高く、約5種類の砂鉄が使用されている。これに対して自然堆積砂鉄は1%前後とその含有量が低いことから、どこか他の地域から移入されたものである可能性が考えられると報告した<sup>(注1)</sup>。では、砂鉄はどこで採集されたものかということになるが、遠所遺跡群内はもちろん、他の製鉄遺跡においても砂鉄採集のための匏流し等の痕跡は認められない。どこか多量に砂鉄が堆積する場所があるのだろうか。

仮に、丹後半島内の砂鉄とすると、考えられることは、砂鉄の組成が採集場所で大きく違うのは、砂鉄の母岩である花崗岩の生成条件が地域的に一定していないことが原因と考えられる。さらに、この地域の花崗岩は、熱変成をうけたためか非常に脆く、したがって風化されやすく、母岩の局所的な組成を反映した砂鉄濃縮層を形成するものと思われる。



遺跡分布図

- |              |             |              |               |               |
|--------------|-------------|--------------|---------------|---------------|
| 1. 遠所遺跡群     | 2. ニゴレ古墳    | 3・4. 小峠遺跡    | 5. ゲンギョウノ山古墳群 | 6. 宮ノ森古墳群     |
| 7. 普甲遺跡      | 8. カジヤ谷遺跡   | 9. ニゴレ遺跡群    | 10. 橋峠遺跡      | 11. 和田野地区製鉄遺跡 |
| 12. 橋木地区製鉄遺跡 | 13. ホエガ谷遺跡  | 4. 赤坂地区木炭散布地 | 15. 小耳尾遺跡     | 16. 大耳尾古墳群    |
| 17. 平ヶ谷遺跡    | 18. 網野銚子山古墳 | 19. 小谷遺跡     | 20. 横枕遺跡      | 21. 宮ノ谷遺跡     |
| 22. 馬場ノ内遺跡   | 23. 神明山古墳   | 24. 高山6号墳    | 25. 高山3号墳     | 26. 西小田遺跡     |
| 27. 黒部銚子山古墳  | 28. 福谷遺跡    | 29. 金谷遺跡     | 30. かせ谷遺跡     | 31. 金久僧遺跡     |
| 32. 奈具遺跡     | 33. 奈具岡遺跡   | 34. 船木A遺跡    | 35. 船木B遺跡     | 36. 扇谷遺跡      |
| 37. 左坂C-15号墳 | 38. 有明1号横穴  | 39. 上野遺跡     | 40. 庄内遺跡      | 41. 有熊遺跡      |
| 42. 細谷遺跡     | 43. 火口遺跡    | 44. 蛭子山古墳    | 45. 作山2号墳     | 46. 白米山古墳     |
| 47. 定山遺跡     | 48. 解谷遺跡    | 49. 法王寺古墳    | 50. 中野遺跡      | 51. 函石浜遺跡     |
| 52. 大明神古墳群   | 53. 岩ヶ鼻古墳   | 54. 茶白山古墳    | 55. 芦高神社古墳    | 56. 畑大塚2号墳    |

このような地域では砂鉄の品位(主としてT・Fe・TiO<sub>2</sub>)の安定を望むことはできない。TiO<sub>2</sub>分の高い砂鉄は還元され難く、また生成するスラグの粘度が高い(粘ばくて流動性が悪い)ので、そのような砂鉄を使用した古代の工人は製鉄炉の操業にかなり苦勞したのではないかと推察<sup>(注2)</sup>される。

## 2. 遺跡の分布状況

丹後における製鉄遺跡の分布については、過去に報告している<sup>(注3)</sup>ので新しく発見された遺跡のみ報告する。この中には、前回の報告に記載もれとなっていた丹後町高山3号墳・大宮町有明1号横穴出土鍛冶滓も含まれる。新発見の遺跡はいずれも弥栄町・岩滝町より見つかったものである。

記載もれとなっていた高山3号墳(7世紀初頭～中葉)出土のものは、精錬鍛冶滓で石室内に副葬されていたものである。

有明1号横穴(6世紀末～7世紀中頃)の埋土中やその周辺からは、カマド・鍛冶滓・フイゴ羽口が出土しており周辺に工房跡が存在する可能性がある。時期については、横穴の再利用を示すものとして、10世紀前半頃に比定される瓶があるが、鍛冶生産に伴うものとは断定できないため、時期については検討を要する。

新発見の製鉄遺跡は製鉄(製錬)と思われるものと、鍛冶工程と思われるものがある。なかには、分析を行ってみたいとわからないものもある。新たに8遺跡を加え丹後全体では鉄滓の出土した遺跡は33遺跡となり、古墳に副葬・供献された製鉄関係遺物の出土は6古墳となった。

岩滝町内のものは、本年度定山遺跡の発掘調査中に検出されたもので、直径35cmの鍛冶炉1基と、鍛冶炉と思われる焼土塊3か所とともに、少量の鍛冶滓が出土している。共伴する須恵器は、6世紀末に比定されるものである。

弥栄町内では、福谷遺跡・金谷遺跡・かせ谷遺跡・金久僧遺跡・船木A・B遺跡・奈具遺跡・奈具岡遺跡の8遺跡が新たに加わった。いずれも竹野川東岸に分布するもので、これらの遺跡は山越え、谷越えの道により通じている。

福谷遺跡は黒部銚子山古墳の南側の谷奥に展開するもので、谷の入り口部分には全長54mの弓ノ木1号墳があり、谷の奥まったところには横穴式石室を内部主体とする福谷古墳があり、製錬滓と考えられる多量の鉄滓とともに、6世紀前半頃と奈良時代後半に比定される遺物が採集された。

金谷遺跡は竹野川の支流である黒部川の上流域にあり、奈良時代後半・鎌倉時代に比定される遺物が採集された。宮津市智恩寺・成相寺には国指定重要文化財の正応3(1290)年



銘鉄製湯舟(直径172.5cm・高63.5cm)が現存する。もともと智恩寺のものは弥栄町の等楽寺、成相寺のものは興法寺に寄進されていたものであることが知られており、鎌倉時代に弥栄町内で製鉄が行われていた可能性が示唆されてきたが、金谷遺跡はこれに伴う遺跡であろうか。

かせ谷遺跡は、金谷遺跡の下流側黒部川の中流域の谷部に展開するもので、弥生時代の遺物が散布する周知の遺跡として知られていたが、確認した結果弥生時代～平安時代にかけての遺物とともに多量に鉄滓が散布しており、製鉄遺跡でもあることが明らかとなった。

金久僧遺跡は、木材搬出用の道路をつけた際に発見されたもので、炭窯の灰原と思われるもの4か所、製鉄炉1基が確認された。また、この遺跡の中にある中谷古墳群の試掘調査を本年度行ったところ、古墳は確認できなかったが円形の炭窯が1基検出された。周辺では遺物が採集されなかったため時期については不明である。製鉄炉が検出された南側の丘陵上には奈良神社裏古墳群(7基)・中田古墳群(4基)・コイロ古墳群(19基)があり、総数30基の古墳が築造されている。

船木A・B遺跡は、船木川の上流域のコイロ古墳群の東側に位置し、やや下流には弥生時代前期・後期の土器が出土する家谷遺跡がある。船木B遺跡が船木A遺跡より上流側になり、船木A遺跡では6世紀前半～9世紀にかけての遺物が出土し、それらに混じって鍛冶滓と思われるものも出土した。船木B遺跡では大半が原野となっているため遺物の採集はほとんどできなかったが、奈良時代後半～平安時代に比定される遺物が若干採集できた。船木B遺跡で製鉄(製錬)を行い、船木A遺跡で鍛冶生産を行っていたとも考えられる。

奈良遺跡(弥生時代中期～後期・中世)は、本年度水田部の調査を行ったところ奈良時代後半～平安時代にかけて土器とともに多量の製錬滓が出土し製鉄遺跡であることが確認された。遺跡の年代も新たに弥生時代以外に6世紀前半～14世紀にまで及ぶことも明らかとなった。

奈良岡遺跡(弥生時代前期～古墳時代後期・平安時代)は、奈良遺跡の南側の丘陵上に展開する遺跡であるが、本年度奈良遺跡の調査と併行して丘陵部分の調査を実施した。丘陵斜面から、8世紀初頭と思われる鍛冶炉、鍛冶滓が出土した。奈良岡遺跡は、本来の遺跡の位置からかなり離れているため奈良遺跡の一部と考えられる。

この奈良遺跡・奈良岡遺跡周辺には、奈良古墳群(12基)・小墓古墳群(3基)・奈良岡北古墳群(7基)の総数22基の古墳が築造されている。

以上が新発見の遺跡であるが、発掘調査が実施されていないものは、その年代を決定することはできないため、遺跡地内に散布する土器等から大まかな年代をだした。

### 3. まとめ

丹後で確認された製鉄遺跡は、遺跡内に金属あるいは製鉄に関連する地名(小字)が多く残されていた。

船木A・B遺跡、福谷遺跡にみられるように、かなり早い段階から谷奥まで入っており、谷奥や谷の入り口、その周辺には多数の古墳が築造されており、製鉄と関連がありそうである。福谷古墳については、竪穴系横口式石室である可能性もある。

遠所遺跡群にみられるように、製鉄遺跡の中に古墳群があるものの、製鉄に関連する遺物の副葬・供献は認められなかったが、古墳に接して製鉄が行われている。6世紀後半という国内でも早い段階で鉄生産が開始できたということは、扇谷遺跡にみられるように早くから丹後では鍛冶生産が開始されており、技術的に鉄生産を受容できる状況でもあり、文化的にも高く、社会的にも高度に組織化された地域であったと考えられ、前述した製鉄と古墳は地域社会との結びつきを示す好資料といえる。

また、日本の鉄生産開始時期が判然としないことや、砂鉄の採集地が不明なため、今後その採集地を考える問題が残っているが、大型の前方後円墳の出現が野田川中流域の蛭子山古墳であり、畿内から日本海に最も近いため重要視されたと思われるが、砂鉄が他の地域から移入されたものとする、日本海から宮津湾、野田川中流域まで原料を運ばなければならない。この時間と労力を考えた場合、海上交通の開けた日本海沿岸部に移ったほうが便利である。砂鉄の陸上げ、製品の出荷地として自然に形成された潟を利用することが重要視され、それを象徴する形で権力の集中がおり、沿岸部に巨大古墳として出現したものと考えられる。大前方後円墳を築造できた背景には、鉄生産の充実をもってしか考えられない。

弥栄町内に製鉄遺跡が多く分布するのは、離湖、竹野川河口からともに同等の距離で到達することができることにあり、かつ木炭を生産する森林や、築炉・築窯のための粘土が豊富にあるため、この地が長く利用されたものと考えられる。

(ますだ・たかひこ＝当センター調査第2課調査第1係主任調査員)

注1 増田孝彦「丹後の古代鉄生産」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注2 佐々木稔氏(株式会社コロイドリサーチ)の教示による。

注3 注1に同じ

## 資料紹介

# 左坂C-18号墳出土の渦巻き状鉄製品

石崎 善久

### 1. はじめに

今回、紹介する資料は1989年から1990年にかけて調査を行った左坂古墳群から出土した渦巻き状の鉄製品である。全国的にみても類例がなく、その用途などについても明確な解釈を得ることができないためここに事実関係を中心とする報告を行い、事例などについて広くご教示を賜りたく思う。

### 2. 遺跡の概要

「渦巻き状鉄製品」は、左坂古墳群C支群第18号墳より出土した。左坂古墳群は京都府中郡大宮町字周枳小字幾坂に所在する。古墳群は総数115基以上の小規模な円墳・方墳より構成される。内部主体は直葬系のものがほとんどと考えられ、現在までの調査により、木棺直葬・石棺直葬・土壙墓が確認されている。副葬品は総じて貧弱であり、少量の鉄器・玉類を持ち、墳丘からは葬送に伴うと考えられる須恵器・土師器が出土している。

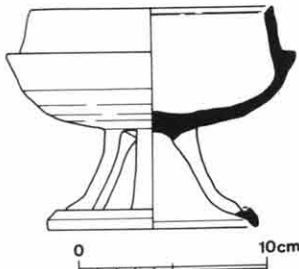
C-18号墳は、C支群の分布する南北に延びる尾根稜線上に立地する。先端側には19号墳・尾根高所側には17号墳が存在する。墳丘は、西半分を後世の削平により失っているが、



第1図 調査地位置図(1/50,000)

1辺10m・高さ約2mを測る方墳に復原することが可能である。墳丘築成は主に地山を成形することにより行うが、墳丘東部分では、部分的に盛り土を行い、墳丘の形を整えていることが判明した。

主体部は、墳頂部平坦面で主軸を東西にとる木棺直葬1基を検出した。なお、主体部の西半部については、後世の削平によって破壊されている。墓壇は素掘りであり平面隅丸長方形を呈



第3図 出土須恵器実測図

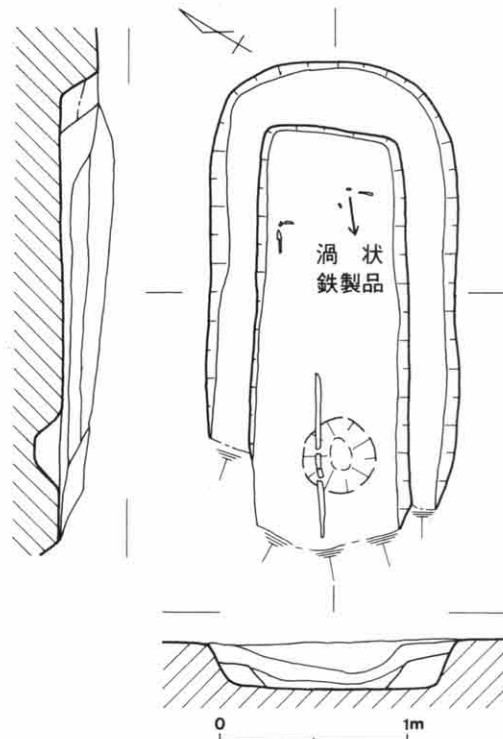
し、地山から掘り込まれる。規模は、幅1.3m・長さ2.6m以上を測る。なお、墓壙底部には径40cmを測る土坑が穿たれる。木棺は、幅0.7m・長さ2.2m以上を測る組み合わせ式木棺である。遺物は、墓壙埋土内で、棺内に落ち込んだかたちで、渦巻き状鉄製品が出土した。渦巻き状鉄製品は3点の破片となって出土しており、木棺の不朽に伴い土圧により破壊されたものとする。その他に棺上と考

えられる位置から長頸鎌1点、刀子1点、須恵器杯蓋片1点が出土し、棺内からは直刀1振が切先を東に向け出土した。その他、出土遺物には17号墳との溝内から須恵器有蓋高杯1点が出土している。C-18号墳の築造年代はこの有蓋高杯の形態の特徴からMT15並行期、6世紀前半を中心とする時期に比定することが可能である。

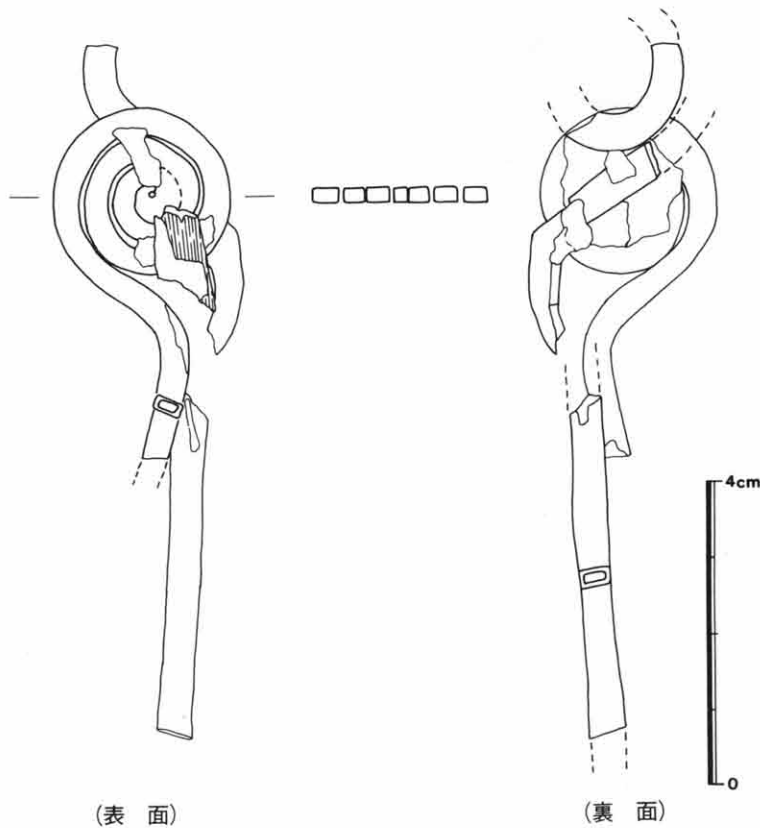
### 3. 遺物の観察

渦巻き状鉄製品は3つの部品に分かれて出土した。その内、渦巻き状の部品2点、棒状の部品1点を確認した。接合関係をみると渦巻き状部分に棒状部分が各々接合する。ただし、この棒状部分の先端は欠損しており、本来は一体のものであったと考える。つまり、今回出土した渦巻き状鉄製品は1個体であったものと考えられる。図示したように、渦巻き状の部分は双方とも癒着したような状態である。

渦巻き状鉄製品は、幅0.5cm・厚さ0.2cmのやや扁平な棒状の鉄素地の両端を4重の渦巻き状に成形して作られている。各々の渦巻き状部分が対照であったのか、非対照であったのか現状では判断しがたいが、2つに折れたものが両端の渦巻き状部分で銹着したものと考えれば、渦巻き状部分は、各々対照になっていた可能性は高いものと判断される。



第2図 C-18号墳主体部実測図



第4図 渦状鉄製品実測図(S=1/1)

このような、結果から復元される本製品の形状は、両端に直径2.3cmの渦巻き状部分を対照に配し、各々の渦巻き状部分の間を長さ7cm以上の棒状部分が介在する構造と考えることができる。

#### 4. まとめ

今回出土した渦巻き状鉄製品は国内では類例のない、希少な遺物であると考えられる。その構造や形態から見るかぎり、本製品は実用品ではなく、何かに付属する飾り金具である可能性は非常に高いものと思われる。

私見によるかぎり、渦巻き状の意匠を有する飾り金具として、奈良県宇陀郡榛原町高田垣内古墳群宮の谷2号墳出土の馬具の飾り金具、京都府八幡市ヒル塚古墳出土の鉄剣に渦巻き状の意匠がみられるが、左坂古墳群出土例とはその形態を異にする。左坂古墳群出土例について、その性格・用途については現段階では不明と言わざるをえない。ただし、韓半島の、慶州九政洞古墳(現、政来洞古墳)出土の刀剣類には両端に渦巻き状部分を持つ飾

り金具が認められており、形態的には国内出土の前2者よりも九政洞古墳出土例に酷似するものといえる。

いずれにしろ、現段階では類例の少ない遺物であることもあり、その性格や用途などについては類例の増加を待ち、慎重に検討していく必要があるものと考えられる。

なお、今回報告をするにあたり当センター主任調査員松井忠春氏より多くのご指導を賜った。記して謝意を表します。

(いしざき・よしひさ＝当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 楠元哲夫ほか「高田垣内古墳群」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第63冊 奈良県立橿原考古学研究所) 1991

注2 榊井豊成・中井英策ほか『ヒル塚古墳発掘調査概報』八幡市教育委員会 1990

注3 当センター主任調査員松井忠春氏のご教示による。

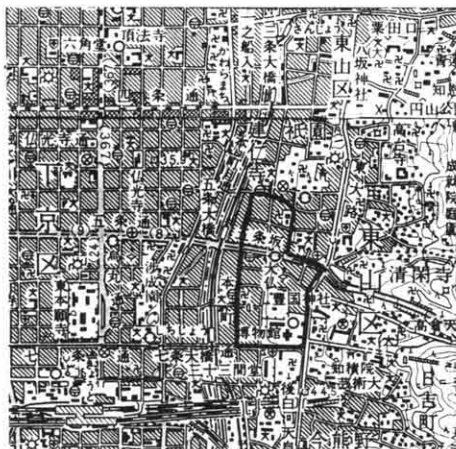
## 府内遺跡紹介

## 56. 六波羅政庁跡

六波羅政庁跡は、京都市東山区門脇町・多門町・池殿町・三盛町の辺り一帯に所在した鎌倉幕府の京都政庁で、一般には六波羅探題と呼ばれている。この政庁の地は、平安時代末期に平氏が居を構えたところで、『平家物語』などには、「六波羅第」・「六波羅殿」・「六波羅亭」などとみえている。

『平家物語』によれば、平清盛の父忠盛は、この六波羅第で出生したと記されている。また、平氏がこの地に屋敷地を持つようになったのは、祖父の正盛の頃といわれているが、詳しいことははっきりとしていない。清盛の代になると平氏は全盛期を迎えるが、その頃には六波羅第もかなり規模を拡充したことが知られている。『山槐記』によれば、清盛の時代には、泉殿(清盛宅)・池殿(頼盛宅)・常光院(正盛菩提所)といった建物や庭園などが広がっていたことがわかる。

その後、源平合戦期になると、寿永2(1183)年7月の木曾義仲の侵攻によって、平氏一族は安徳天皇や建礼門院とともに都落ちすることになる。その際、六波羅第は、平氏のもう一つの屋敷地である西八条殿とともに火を放たれ、常光院を残してあとはすべて焼失してしまったのである。



第1図 遺跡所在地(1/50,000)

源頼朝は、平氏の滅亡後、六波羅第の跡地を接收し、新たに「六波羅御亭」を建設した。『吾妻鏡』建久元(1190)年10月21日条には、「二品御入洛、---令着六波羅新御亭、故池大納言頼盛御旧跡。比間被建之。」とあり、頼朝は六波羅第のうち、平頼盛亭の建物を上洛時の宿舎として用いており、頼朝自身が使用したことがわかる。

頼朝の「六波羅御亭」も、『百練抄』建仁3(1203)年10月29日には、「未時許、自六条坊門高倉辺、焼亡出来、及河原院并鎌

倉前右大将頼朝亭」とあるように、再び焼失している。その後、しばらく再建されなかったが、承久の乱を境に大きく様相が変化することとなった。

上横手雅敬氏の研究によれば、承久の乱以前のかつての京都守護の役割は、①京都の警備、②西国への命令伝達が中心であった。ところが、西国の御家人は一応は鎌倉幕府に属しながら、一方で院や貴族などの荘園領主にも属するといった関係から、幕府の京都守護には統率されない面が強く、多くは京方の軍隊の主力になっていた。

そこで、幕府は、承久の乱後、執権北条義時の嫡子泰時を六波羅探題とし、それまでの京都守護に代わって、独自の裁判権や御家人の統率権も持った強大な力をもたせるに至ったのである。ただし、その裁判権や統率権も幕府内部における北条氏の覇権と関係しており、あくまで重要な事柄については幕府が最終的な裁量権を握っていたのである。そのため、幕府の権威が低下するようになると御家人の統率権力も維持できなくなることもあった。しかも、派遣されるのは、北条氏の一族で、北条氏直系の得宗家ではないものの、北条氏傍流の実力者が多かったことから、北条氏の執権政治の動向と深く係わって存在したことが明らかになっている。

六波羅探題は、このように鎌倉幕府中央の執権政治のあり方とかかわっていたことから、その組織や構造もきわめてよく似ている。幕府の場合は、執権・連署(当時は両執権と呼んだ)の二人がおり、実質は執権の権力が大きかった。六波羅探題の場合も、北方と南方の二人が鎌倉から派遣される二人体制であるが、そのうち南方は22年間も欠員がでるなど、基本的に南方の方が北方に対して低く見られていたといわれている。

六波羅探題の構造は、このように、六波羅北方(北殿)と六波羅南方(南殿)に分かれ、政庁のなかに侍所や問注所などの施設をもっていた。北方の範囲には六波羅密寺もあり、仏教寺院も存在した。この六波羅探題のあったところが六波羅政庁跡である。『坊目志』によれば、その範囲が示されており、北方が五条末から六条坊門末、南方が六条坊門末から六条末まで、いずれも大和大路以東の地を占めていたとあるが、復原されたのは、第2図に見られるように、やや北方が小さく南方が大きい。そのうち、かつての平氏の六波羅邸は北方の部分に相当するといわれている。

この六波羅探題は、鎌倉時代の終わりに幕



第2図 六波羅政庁(1/20,000)



府と運命をともにした。足利尊氏による攻撃を受けて焼失してしまったことをいう。その後、尊氏自身の手により六波羅に奉行所が設けられており、六波羅探題滅亡後の京都の治安維持にあたったのである。このようなことからみれば、六波羅の地は、平氏はその居を構えて以後、南北朝時代に至るまで、京都の政治的・警察的な機能を負った重要な地域であったことがわかる。

六波羅の地の発掘調査は、六波羅密寺の境内で2か所実施されたほか、東山郵便局の建て替えの際にも行われている。近年では、1980年、1981年の2度調査が実施されているが、平氏の六波羅第及び、北条氏の六波羅探題に関する遺構は見つかっていない。ただ、六波羅密寺の境内で行われた調査で、密教法具のかたちをした軒平瓦や、梵字を表現した軒丸瓦といった瓦類が数多く出土した。また、五輪塔をかたちどったいわゆる泥塔も2,000点以上も見つかった。その他、一部ではあるが、他の調査において建物跡も検出されており、今後の調査で六波羅政庁跡の状況の解明が期待される。

(土橋 誠)

<参考文献>

井上満郎・川島将生他「第5章 武家支配の浸透」『京都の歴史』 京都市 1971年5月

『京都府の地名』 平凡社 1981年3月

前田義明「六波羅政庁跡」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年3月

百瀬正恒・吉村正親・家崎孝治他「試掘・立会調査 京域外の遺跡」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年3月

上横手雅敬『鎌倉時代政治史研究』 吉川弘文館 1991年6月

高橋慎一郎「空間としての六波羅」『史學雑誌』101-6 1992年6月

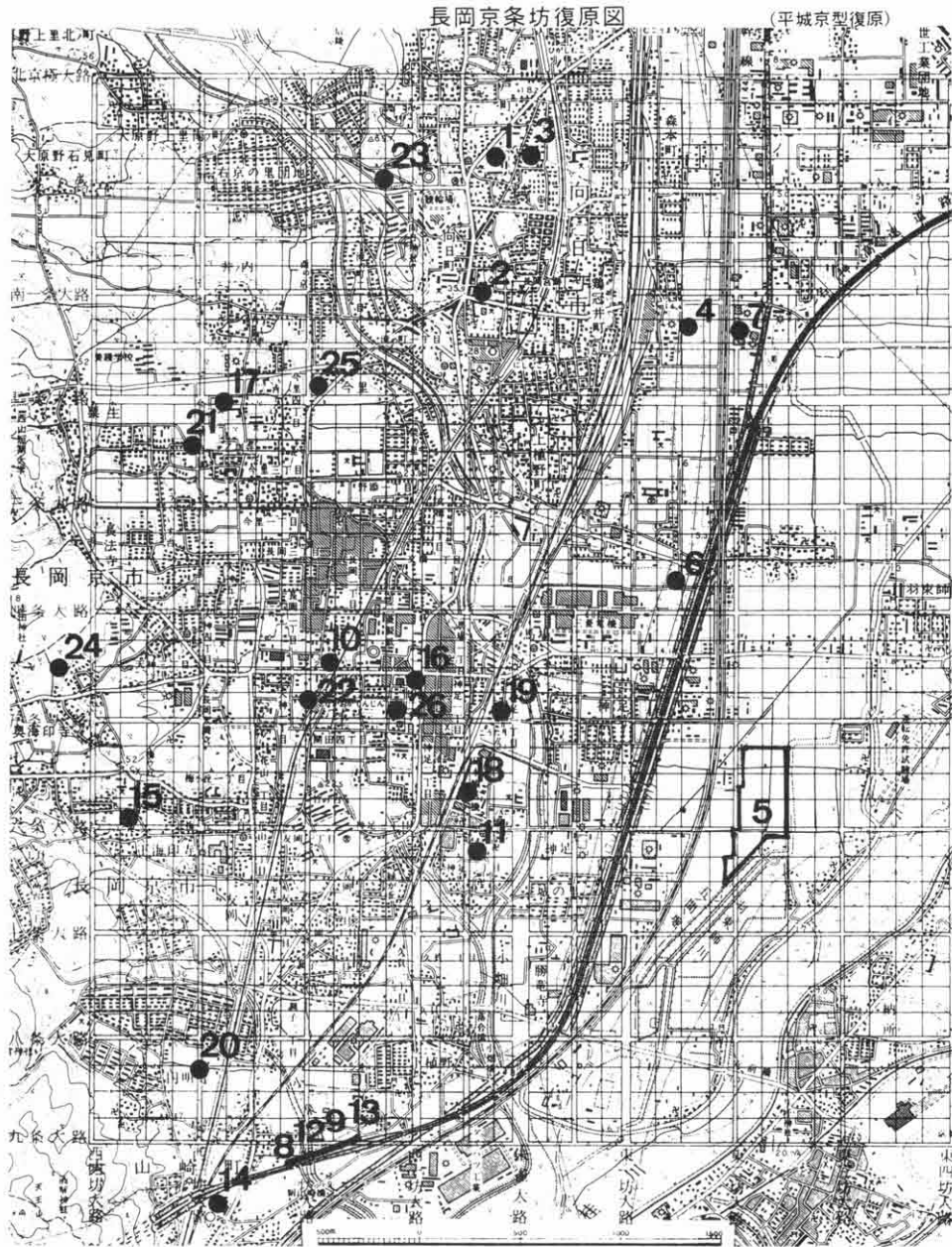
## 長岡京跡調査だより・42

平成4年5月27日・6月24日・7月22日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮内3件、左京域4件、右京域19件、京外その他4件の計30件であった(一覧表・位置図参照)。このうち、主なものについて調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1992年7月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内268次	7AN12L	向日市寺戸町西野辺	(財)向日市埋文	4/6~6/30
2	宮内269次	7AN14W	向日市鶏冠井町大極殿	(財)向日市埋文	4/6~5/2
3	宮内270次	7AN12M	向日市寺戸町東野辺	(財)向日市埋文	6/22~7/29
4	左京287次	7ANEJK-4	向日市鶏冠井町上古8	(財)向日市埋文	5/12~6/30
5	左京288次	7ANMND-2	京都市伏見区淀樋爪町	(財)京都市埋文	4/1~
6	左京289次	7ANFTB-5	向日市上植野町ヶ坪	(財)向日市埋文	5/6~6/29
7	左京290次	7ANEKD-4	向日市鶏冠井町小深田	(財)向日市埋文	6/1~6/15
8	右京367次	7ANSIR-3	大山崎町円明寺・井尻	(財)京都府埋文	4/8~2/26
9	右京368次	7ANSID-2	大山崎町円明寺壺町田	(財)京都府埋文	4/8~2/26
10	右京389次	7ANKSM-6	長岡京市長岡一丁目	(財)長岡京市埋文	2/12~4/23
11	右京393次	7ANMKO-2	長岡京市東神足二丁目	(財)長岡京市埋文	4/2~5/6
12	右京394次	7ANSDD-6	大山崎町円明寺・百々	(財)京都府埋文	4/8~2/26
13	右京395次	7ANSID-4	大山崎町円明寺壺町田	(財)京都府埋文	4/8~2/26
14	右京396次	7ANSDD-3	大山崎町円明寺百々8	大山崎町教委	4/2~4/26
15	右京397次	7ANOJU-2	長岡京市下海印寺北条	(財)長岡京市埋文	4/8~5/7
16	右京398次	7ANKSM-7	長岡京市開田二丁目34	(財)長岡京市埋文	4/15~5/20
17	右京399次	7ANIKU-4	長岡京市今里五丁目20	(財)長岡京市埋文	4/21~6/30
18	右京400次	7ANMNM-3	長岡京市東神足二丁目	(財)長岡京市埋文	6/8~7/17
19	右京401次	7ANMSL-4	長岡京市東神足一丁目	(財)長岡京市埋文	5/15~
20	右京402次	7ANSSZ	大山崎町円明寺西法寺	大山崎町教委	5/7~
21	右京403次	7ANIHY-3	長岡京市今里彦林4	(財)長岡京市埋文	5/19~6/30
22	右京404次	7ANKSC-4	長岡京市天神一丁目	(財)長岡京市埋文	6/1~6/26
23	右京405次	7ANBTK	向日市寺戸町天狗塚	(財)向日市埋文	6/2~7/15
24	右京406次	7ANPTD	長岡京市奥海印寺谷田	(財)長岡京市埋文	7/7~
25	右京407次	7ANIAC-3	長岡京市今里畔町23	(財)長岡京市埋文	7/10~
26	右京408次	7ANKST-4	長岡京市開田二丁目	(財)長岡京市埋文	7/20~
27	山城国府跡第20次		大山崎町大山崎竜光3	大山崎町教委	5/20~5/22
28	中海道遺跡第21次		向日市物集女町中条	(財)向日市埋文	6/15~7/25
29	山城国府跡第26次		大山崎町大山崎白味才	大山崎町教委	5/25~7/15
30	山城国府跡第27次		大山崎町大山崎西谷4	大山崎町教委	6/24~7/15



▽番号は一覧表・本文 ( ) 内と対応

調査地位置図

右京第287次（4）

（財）向日市埋蔵文化財センター

昨年度からの継続調査で、正殿建物跡を核とする内郭域と、それを中心に東西南の三方に配置された区画内から、それぞれ規模の大きな掘立柱建物跡群が見つかっている。今回、対象となった内郭西側の調査域からは、先に検出されている二条条間北小路の南側側溝の延長部と西脇殿跡を確認し、同建物跡は、東脇殿と同規模であることが判明した。西外郭東半部では、井戸や溝が集中し、東外郭とは異なった利用のあり方がうかがえる。出土遺物では、わが国初の本製笏の他、「百」字の刻印瓦が多量に出土し、勅旨所等の天皇に密着した役所がこの施設の造営にあたった可能性が考えられている。

左京第290次（7）

（財）向日市埋蔵文化財センター

二条条間大路(新呼称では二条大路)の北側溝を確認し、東二坊大路の交差点の状況が明らかになった。大路交差点の側溝では、橋脚の他、祭祀遺物・獣骨を検出した。このうちの大形墨描人形には、熟練したタッチで仏のように整った顔が描かれていた。

右京第403次（21）

（財）長岡京市埋蔵文化財センター

奈良時代の、倉庫と思われる柱間2間×2間あるいは3間の総柱建物跡6棟の他、柵列・溝が検出された。この他、中世の溝群が見つかっている。

山城国府跡第26次

大山崎町教育委員会

(29)

平安時代の溝2条・道路面・柱穴、鎌倉時代の柱穴土坑、室町時代の井戸・埋甕遺構群・柱穴を検出。平安時代の道路面は、山陽道の路面と考えられ、部分的にバラスが敷かれている。検出幅6.5mで、現府道下まで延びるものと思われる。検出長は、7.5m。柵列は、東西方向を示し道路面と平行する。宅地の区画である。室町時代埋甕遺構群は、4列×5列の埋甕群で、南東の2穴が欠けており18穴が残る。甕はすべて抜き取られていた。出土遺物には、縄文から室町時代までの各時期の遺物があるが、銭貨・八稜鏡・輸入陶器類など、この地の賑わいぶりを示す資料も見られる。

(辻本和美)

センターの動向(4. 5~7)

1. できごと
5. 2 綾部市資料館開館式に城戸局長出席
- 6 城戸事務局長、八木城跡(八木町)・天若遺跡(日吉町)現地視察  
平安京跡(京都市堀川会館)発掘調査開始  
今城跡(山城町)発掘調査開始
- 11 立命館大学和田晴吾教授、西山塚古墳現地指導  
長岡京跡左京第268次(京都市)試掘調査開始
- 14 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於:名古屋市)出席(城戸事務局長、佐伯事務局長次長、安田課長補佐)
- 18 薬師古墳群(久美浜町)発掘調査開始  
定山遺跡(岩滝町)発掘調査開始  
細谷古墳群(綾部市)発掘調査開始  
八木城跡(八木町)発掘調査開始
- 19 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於:長岡京市)出席(城戸事務局長、佐伯事務局長次長、安田課長補佐)  
大切遺跡(田辺町)発掘調査開始
- 23~24 日本考古学協会(於:山梨県甲府市)出席(中川和哉、石崎善久調査員)
- 25 上中遺跡(京北町)発掘調査開始
- 26 奈良岡・奈良谷遺跡(弥栄町)発掘調査開始
- 26~27 城戸事務局長、北部現場視察
- 27 長岡京連絡協議会
6. 1 燈籠寺遺跡(木津町)発掘調査開始
- 5 監事監査
- 6 第66回研修会(於:亀岡市)別掲
- 12 今城跡関係者説明会
- 15 塩谷古墳公園開園式(丹波町)出席(安藤課長)
- 18 平安京跡(京都市堀川会館)現地説明会
- 18~19 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於:広島市)出席(城戸事務局長、杉江主事、木村主事)
- 19 細谷古墳群現地説明会
- 24 長岡京連絡協議会
- 25 大切遺跡関係者説明会
- 25~26 全国埋蔵文化財法人連絡協議会・コンピューター等導入研究委員会  
於:埼玉県)出席(土橋主任調査員・今村主事)
- 26 第34回役員会・理事会開催  
於:京都堀川会館一福山敏男理事長、樋口隆康副理事長、城戸秀夫常務理事、中沢圭二、上田正昭、

藤井 学、足利健亮、都出比呂志、  
藤田价浩、京極隆夫、武田 暹、  
堤圭三郎の各理事、吉田三枝子監  
事出席

7.3~4 埋蔵文化財写真技術研究会(於：  
奈良国立文化財研究所)出席(田中  
彰調査員)

4 細谷古墳群発掘調査終了(5.18~)

6 祇園谷遺跡(京北町)発掘調査開始

22 長岡京連絡協議会

24 上中遺跡(京北町)発掘調査終了  
(5.25~)

25~26 遺跡汎用システム「てづかや  
ま」研修会(於：帝塚山大学)出席

(伊野係長・戸原主任調査員)

27 樋口隆康副理事長、西山塚古墳  
視察

30 薬師古墳群(久美浜町)現地説明  
会

## 2. 普及啓発事業

6.6 第66回研修会開催(於：亀岡市  
民ホール)－京都府北部の古墳の  
調査－野島 永「南丹地域の古墳  
の調査について」、下川賢司「丹  
後霧ヶ鼻古墳群の調査について」、  
崎山正人「福知山市下山古墳群の  
調査について」

(安藤信策)

受贈図書一覧 (4. 5. 1 ~ 7. 31)

苫小牧市埋蔵文化財センター	苫小牧東部工業地帯の遺跡群 IV、とまこまい埋文だより No.26・27
青森県埋蔵文化財調査センター	埋文あおもり 第11号
秋田県埋蔵文化財センター	秋田県文化財調査報告書 第219~226集、秋田県文化財センター年報 10、秋田県文化財センター研究紀要 第7号
(財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第161・162~170・172~176・178集
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No.56
(財)勝田市文化・スポーツ振興公社	(財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第6・7集、ぶんかざいほごねんぼうフィールドノート Vol.4
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	研究紀要 9、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 第124・126・127・130・133・135集、埋文群馬 No.13・14合併号
(財)千葉県文化財センター	研究連絡誌 第33・34号、千葉県文化財センター研究紀要 13
(財)市原市文化財センター	第7回 (財)市原市文化財センター遺跡発表会要旨、(財)市原市文化財センター調査報告書 第15・32・37・43~45・47集、大和田遺跡、今富大道遺跡、唐崎台遺跡、千草山遺跡・東千草山遺跡、私たちの文化財 18・19
(財)香取郡市文化財センター	(財)香取郡市文化財センター調査報告書 第4~7集
神奈川県立埋蔵文化財センター	かながわの考古学 第2集、池子遺跡群調査だより 11~16
横浜市埋蔵文化財センター	三殿台南東斜面遺跡試掘調査報告、大口台遺跡発掘調査報告書、港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 X III
山梨県埋蔵文化財センター	研究紀要 7、山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第43・46・59・62・66集
(財)浜松市文化協会	梶子遺跡 VIII、国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書 V
(財)山梨文化財研究所	帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第3集
(財)長野県埋蔵文化財センター	長野県埋蔵文化財センター年報 8、(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 11~13、長野県埋蔵文化財ニュース No.34
(財)岐阜県文化財保護センター	きずな 第4号
(財)富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所	東海北陸自動車道関連発掘調査概報(3)、埋蔵文化財年報(3)

(財)滋賀県文化財保護協会	石田三宅遺跡発掘調査報告書 II、横江遺跡発掘調査報告書 II、樋之口遺跡、常衛遺跡発掘調査報告書、馬淵遺跡発掘調査報告書、高橋遺跡、石山貝塚発掘調査報告書、霊仙寺遺跡発掘調査報告書、木瓜原遺跡試掘調査報告書、ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書 XVII-1・XVIII-1・3・8・9、錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要、昭和63年度 滋賀県埋蔵文化財調査年報、紀要 第5号、平成3年度調査埋蔵文化財展 レトロ・レトロの展覧会
(財)滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第145・146号
(財)栗東町文化体育振興事業団	栗東町埋蔵文化財調査 1991年度年報
(財)大阪文化財センター	大阪府下埋蔵文化財研究会(第26回)資料、日置荘遺跡 その2-3 その6-2、大阪城の発掘調査 2、大庭遺跡 I、(財)大阪文化財センター通信 No.8
(財)大阪市文化財協会	葦火 38号
(財)東大阪市文化財協会	西ノ辻遺跡第28・29次発掘調査報告、東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告 I、東大阪市文化財協会ニュース Vol.5 No.4
(財)枚方市文化財研究調査会	枚方市文化財年報 11、ひらかた文化財だより 第10・11号
(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究会報告 32・33
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所資料 第33～35冊、奈良国立文化財研究所学報 第50冊、文化財情報システム実施設計書(1)
(財)元興寺文化財研究所	元興寺文化財研究 No.41
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財報告 22、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 80、所報吉備 第12号
鳥取県埋蔵文化財センター	鳥取埋文ニュース No.32
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒 No.216・217
(財)香川県埋蔵文化財センター	空港跡地遺跡発掘調査概報 平成3年度、(財)香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成3年度
岩手県教育委員会	岩手県文化財調査報告 第91集
郡山市教育委員会	片平城跡 I、郡山東部 12、蒲倉古墳群
いわき市教育委員会	根岸遺跡、いわき市埋蔵文化財調査報告 第31集
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書 第149・157・161・162集
足利市教育委員会	法界寺跡発掘調査基本計画書、足利市埋蔵文化財調査報告 第24集
前橋市教育委員会	平成2年度文化財調査報告書 第21集



木更津市教育委員会  
酒々町教育委員会  
袖ヶ浦市教育委員会  
富里町教育委員会  
山武町教育委員会  
東京都教育庁  
小平市教育委員会  
狛江市教育委員会  
小田原市教育委員会  
鎌倉市教育委員会  
平塚市教育委員会

入間市教育委員会  
大宮市教育委員会  
静岡市教育委員会

袋井市教育委員会  
稲沢市教育委員会  
瀬戸市教育委員会

豊橋市教育委員会  
松本市教育委員会  
岡谷市教育委員会  
岐阜市教育委員会

小矢部市教育委員会

富山県埋蔵文化財センター

小松市教育委員会

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

勝山市教育委員会

大津市教育委員会

草津市教育委員会

長浜市教育委員会

彦根市教育委員会

栗東町教育委員会

大阪市教育委員会

木更津市文化財調査集報 I

上宿遺跡、本佐倉南大堀遺跡

市民のための『袖ヶ浦の歴史』

平成3年度 富里町埋蔵文化財発掘調査報告書

平成2・3年度 山武町内遺跡群発掘調査報告書

小笠原諸島他遺跡分布調査報告書

小平市埋蔵文化財調査報告書 第19集

弁財天池遺跡

小田原市文化財調査報告書 第36～39集

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8、史跡永福寺跡

平塚市文化財シリーズ 20～22、平塚市埋蔵文化財調査報告書 第9集

入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告 第11～13集

大宮市文化財調査報告 第31集

静岡市の埋蔵文化財発掘調査の概要 平成2年度、静岡市埋蔵文化財発掘調査報告 29

大門大塚古墳、若作遺跡 若作古墳群

稲沢市文化財調査報告 XXXVIII・XXXIX

平成2年度 瀬戸市埋蔵文化財年報、東本町A遺跡、海上遺跡、上半田川遺跡穴田南古窯跡群 IV

豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第14集

小池遺跡、松本市文化財調査報告 No.93～98

平成3年度 榎垣外遺跡ほか発掘調査報告書

岐阜市埋蔵文化財ニュース 1

小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第34・35冊

埋文とやま 第38号

湯上谷古窯跡発掘調査報告書

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター年報 6

勝山市埋蔵文化財調査報告 第8集

大津市埋蔵文化財調査報告書(20)

草津市文化財調査報告書 19

長浜市埋蔵文化財調査概報 1

彦根市埋蔵文化財調査報告書 第22・23集

岡遺跡発掘調査報告書

大阪市文化財年報 昭和61・62・平成元年度、昭和61・平成

池田市教育委員会	2年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
和泉市教育委員会	池田市文化財調査報告 第14集
柏原市教育委員会	和泉市埋蔵文化財発掘調査概報 2
	平尾山古墳群平野・大泉支群、高井田山古墳、柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1991年度、柏原市遺跡群発掘調査概報 1991年度、柏原市東山地区分布調査概報 1991年度
河内長野市教育委員会	河内長野市文化財調査報告書 第21・22輯
熊取町教育委員会	熊取町埋蔵文化財報告 第18集
大阪狭山市教育委員会	さやま誌 創刊号
吹田市教育委員会	平成3年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報、史跡七尾瓦窯跡環境整備報告書、吹田市文化財ニュース No.13
泉南市教育委員会	泉南市文化財調査報告書 第23集
高石市教育委員会	綾井城と専称寺、高石市文化財調査概要 1991-1、高石市史紀要 第1・2号、高石市郷土史研究紀要 第2・4～10号
高槻市教育委員会	高槻市文化財年報 平成2年度、高槻市文化財調査概要 XⅦ、遺跡ガイド 5～8
豊中市教育委員会	豊中市文化財調査報告書 第28・31集
東大阪市教育委員会	東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要 31
枚方市教育委員会	枚方市文化財調査報告書 第26集
藤井寺市教育委員会	藤井寺市文化財報告 第8集
八尾市教育委員会	八尾市文化財調査報告 25・26
奈良市教育委員会	奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1991、奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度、平城京東市跡推定地の調査 X
橿原市教育委員会	橿原市埋蔵文化財概報 9
田原本町教育委員会	田原本町埋蔵文化財調査年報 3、田原本町埋蔵文化財調査概報 12
天理市教育委員会	天理市埋蔵文化財調査概報(1992)、天理市埋蔵文化財調査概報 長寺遺跡(第5・6次)・大和古墳群・クリヤダ地区
大和郡山市教育委員会	大和郡山市文化財調査概要 20～24、大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書 第1・2集、平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告
大和高田市教育委員会	コンピラ山古墳群 第2次発掘調査概報
岩出町教育委員会	平成2・3年度 岩出町遺跡調査概要報告書
赤穂市教育委員会	赤穂市文化財調査報告書(36)
芦屋市教育委員会	芦屋市文化財調査報告 第22集、'91 グラフ芦屋

伊丹市教育委員会	伊丹市埋蔵文化財調査報告書 第16集、有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ
小野市教育委員会	船木南山古墳発掘調査概要書
加東郡教育委員会	上滝野・宮ノ前遺跡
新宮町教育委員会	新宮町文化財調査報告 15・17
太子町教育委員会	太子町文化財調査報告 1、太子町文化財資料 第28号
高砂市教育委員会	高砂市文化財調査報告書 第9・10集
中町教育委員会	中町文化財報告 1、門前・上山遺跡
西脇市教育委員会	西脇市埋蔵文化財調査報告書 4
三田市教育委員会	兵庫県三田市文化財調査報告 第8冊
八鹿町教育委員会	兵庫県八鹿町文化財調査報告書 第10集
岡山市教育委員会	矢田の宝篋印塔所在地発掘調査報告、百間川沢田(市道)遺跡発掘調査報告
吉井町教育委員会	小枝2号墳、備前周匝茶白山城址発掘調査報告書
鳥取市教育委員会	六部山古墳群発掘調査概要報告書、鳥取市文化財報告書 31、史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 天球丸発掘調査概要報告書
東広島市教育委員会	東広島市文化財調査報告書 第26集、東広島市の文化財 古墳Ⅰ
福岡市教育委員会	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第271～286・288～315集、愛宕山古墳調査報告書、福岡市埋蔵文化財年報 Vol. 5
直方市教育委員会	直方市文化財調査報告書 第13集
前原町教育委員会	前原町文化財調査報告書 第38～43集、萩原の文化財
佐賀市教育委員会	佐賀市文化財調査報告書 第36～42集
唐津市教育委員会	唐津市文化財調査報告書 第48～51集
三光村教育委員会	三光地区遺跡群発掘調査概報 Ⅱ
三加和町教育委員会	三加和町文化財調査報告 第6集
宮崎市教育委員会	西ノ原第2遺跡、蓮ヶ池横穴群
えびの市教育委員会	えびの市埋蔵文化財調査報告書 第6・10集
佐土原町教育委員会	下村窯跡調査概要報告書
秋田県立博物館	秋田県立博物館研究報告 第17号、秋田県立博物館館報 平成3年度、博物館ニュース No.87・88
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第17号
日立市郷土博物館	日立市郷土博物館収蔵資料目録 第8集、日立市郷土博物館年報 平成2年度 第12号 市民と博物館 第31号
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第37・39・40集、歴博 第53号

千葉県立中央博物館	千葉県立中央博物館研究報告—人文科学— 第2巻第1号
千葉県立房総風土記の丘資料館	千葉県立房総風土記の丘だより 第23号
千葉市立加曾利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第19号
君津市久留里城址資料館	君津市久留里城址資料館年報 平成3年度
船橋市郷土資料館	写真でみる船橋 2、資料館だより 第52～56号
成田山霊光館	なりた No.53・54
芝山はにわ博物館	企画展 はにわ人の服飾図録
群馬県立歴史博物館	群馬県立歴史博物館だより No.47
板橋区立郷土資料館	板橋区立郷土資料館年報 第4号、板橋区立郷土資料館紀要 第9号
大田区立郷土博物館	大田区立郷土博物館紀要 第2号、写された大田区—懐かしい・まちとくらし—、復刻版博物館ノート No.1～No.50、特別展 埴輪の誕生、大田区立郷土博物館だより 第26号
世田谷区立郷土資料館	世田谷の歴史と文化—展示ガイドブッカー、資料館だより No.16
調布市郷土博物館	調布市郷土博物館だより No.40、郷土ウォッチング No.5
出光美術館	出光美術館館報 第78号
府中市郷土の森	府中市郷土の森だより あるむぜお
茅ヶ崎市文化資料館	資料館だより No.79
横浜市三殿台考古館	横浜市三殿台考古館館報 No.17
埼玉県立歴史資料館	研究紀要 第14号、也加多 第26号
沼津市歴史民俗資料館	沼津市博物館紀要 16、沼津市歴史民俗資料館資料集 10、資料館だより 103号
山梨県立考古博物館	山梨県立考古博物館だより No.25
名古屋市博物館	名古屋市博物館研究紀要 第15巻、名古屋市博物館常設展「尾張の歴史」展示図録
愛知県陶磁資料館	愛知県陶磁資料館駐車場予定地内南山 8号・9—あA・D号窯発掘調査報告、中清田古窯跡群発掘調査報告書、企画展「近江のやきもの」
石川県立歴史博物館	家紋
小松市立博物館	小松市立博物館だより 第52号
氷見市立博物館	平成3年度氷見市立博物館年報 第10号、氷見市近世史料集成 第11・12冊
福井県立博物館	ふくいミュージアム No.21
斎宮歴史博物館	企画展 古代の祈り—山岳信仰から経塚へ—、国史跡斎宮跡 平成3年度発掘調査概報、斎宮歴史博物館だより No.13

- 彦根城博物館  
大阪市立博物館  
大阪府立弥生文化博物館  
堺市博物館  
香芝市二上山博物館  
兵庫県立歴史博物館  
神戸市立博物館  
鳥取県立博物館  
島根県八雲立つ風土記の丘  
広島県立歴史博物館  
日本はきもの博物館  
福山市立福山城博物館  
山口県立山口博物館
- 福岡市博物館  
佐賀県立博物館・佐賀県立美術館  
佐賀県立九州陶磁文化館
- 東北大学埋蔵文化財調査室  
茨城大学人文学部文化財情報学教室  
筑波大学歴史・人類学系先史学・考古学コース  
東京大学文学部考古学研究室
- 慶應義塾大学  
早稲田大学
- 國學院大學考古学資料館  
東洋大学文学部史学科研究室  
名古屋大学文学部考古学研究室  
大阪大学文学部考古学研究室
- 大手前女子大学  
大谷女子大学資料館  
岡山大学埋蔵文化財調査研究セン
- 彦根城博物館だより 18  
大阪市立博物館報 No.31、大阪市立博物館研究紀要 第24冊  
大阪府立弥生文化博物館図録 4  
堺市博物館館報 第11号  
よみがえる二上山の3つの石  
塵界 第5号、博物館普及資料 第10集  
博物館だより No.40  
郷土と博物館 73・74号、鳥取県立博物館研究報告書 第29号  
八雲立つ風土記の丘 No.114  
広島県立歴史博物館展示図録 第5・6冊  
はきもの図録シリーズ 8  
福山市立福山城博物館だより 第2号  
山口県立山口博物館館報 15号、山口県立山口博物館研究報告 第18号  
福岡市博物館だより No.7  
佐賀県立博物館・美術館調査研究書 第16集  
肥前地区古窯跡調査報告書 第9集、セラミック九州 No.25
- 東北大学埋蔵文化財調査年報 4・5  
博古研究 第3号  
筑波大学先史学・考古学研究 第3号
- 東京大学文学部考古学研究室紀要 第10号、日本とシベリアとの先史文化交流に関する日ソ共同調査  
湘南藤沢キャンパス内遺跡 第3巻 縄文時代Ⅱ部  
古代 第93号、早大埋蔵文化財調査室月報 No.79・80 滝口宏先生追悼号  
國學院大學考古学資料館紀要 第8輯  
東洋大学文学部紀要 第45集  
考古資料ソフテックス写真集 第7集、名古屋大学考古学陳列室だより 第3号  
大阪大学文学部考古学研究報告 第2冊、雪野山古墳Ⅱ、桜井谷窯跡群 2-23号窯跡  
大手前女子大学論集 第25号  
大谷女子大学資料館報告書 第27冊  
岡山大学構内遺跡発掘調査報告書 第5冊、岡山大学埋蔵文

ター	化財調査研究センター報 第7号
九州大学九州文化史研究施設	九州文化史研究所紀要 第37号
比較考古学部門	
別府大学付属博物館	別府大学付属博物館だより No.37
熊本大学文学部考古学研究室	研究室活動報告 27
嶺南大校博物館	嶺南大校博物館學術調査報告 第9・12冊
日本窯業史研究所	日本窯業史研究所報告 第38～41冊
群馬県企業局開発課分室	三原田遺跡 第3巻
東邦考古学研究会	東邦考古 第16号
山武考古学研究所	宮崎-14遺跡発掘調査報告書、長美代遺跡発掘調査報告書、 春蔵遺跡発掘調査報告書、宮平遺跡 平成3年度発掘調査報告書、 高田城址発掘調査報告書、大國塚2号墳、前山2遺跡、 荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡、小杉流通業務団地内No.1遺跡、 日立市文化財報告 第28・30集
宮内庁書陵部	書陵部紀要 第43号
国立国会図書館	日本全国書誌 No.1861
白山史学会	白山史学 第28号
都営川越道住宅遺跡調査会	武蔵台東遺跡発掘調査概報 2
日本考古学協会	日本考古学年報 43
学研	日本の歴史 中 第47巻第4号
(株)ジャパン通信社	月刊文化財発掘出土情報 114号
名著出版	歴史手帖 第224～226号
(株)雄山閣出版	季刊考古学 第40号
鎌倉考古学研究所	瑞泉寺周辺遺跡内やぐら・No.342遺跡内やぐら・極楽寺旧境内 遺跡内やぐら、十二所稲荷小路遺跡内やぐら、長谷小路南 遺跡、下馬周辺遺跡、鎌倉考古 No.22
玉川文化財研究所	上品濃遺跡群発掘調査報告書、県営片倉町団地内遺跡発掘調 査報告書、中村宮ノ谷遺跡発掘調査報告書
大宮市遺跡調査会	大宮市遺跡調査会報告 第32～35集
(財)古代学協会	古代文化 第400～402号、古代学研究所研究紀要 第2輯、土 車 第62号
(財)冷泉家時雨亭文庫	志くれてい 第41号
大阪狭山市	いけだより Vol.1
中世土器研究会	中世土器研究 第66号
朝鮮学会	朝鮮学報 第143輯

帝塚山考古学研究所

(財)淡神文化財協会

(財)のじぎく文化財保護研究財団

姫路市立城郭研究室

地藏山遺跡発掘調査委員会

博物館等建設推進九州会議

朝地町公民館

京都市文化観光局

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

京都府教育委員会

網野町教育委員会

加悦町教育委員会

弥栄町教育委員会

園部町教育委員会

長岡京市教育委員会

宇治市教育委員会

八幡市教育委員会

南山城村教育委員会

京都府北桑田教育局

京都府京都文化博物館

京都府立丹後郷土資料館

京都府立山城郷土資料館

京都市歴史資料館

亀岡市文化資料館

綾部市資料館

前方後円墳を考える、考古学における計量分析、古代の寺を  
考える、考古学における熱ルミネセンス年代測定、第5回考  
古学におけるパーソナルコンピュータ利用の現状

見蔵岡遺跡

のじぎく文化財だより 創刊号～第3号

城郭研究室年報 Vol.1 1991

玉野市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

文明のクロスロード Museum Kyushu 39号

朝地地区遺跡群発掘調査概報 VII

平安京跡発掘調査概報 平成3年度、焼場谷炭窯跡発掘調査  
概報 平成3年度、京都市内遺跡試掘調査概報 平成3年度、  
京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度、京都市文化財だ  
より 第17号

長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成2年度、長岡京市埋  
蔵文化財調査報告書 第6集

京都の文化財 第10号、埋蔵文化財発掘調査概報(1992)

網野町史 上巻

加悦町文化財調査報告 第16・17集

ロマンのふるさと弥栄むかしむかし

園部町文化財調査報告 第8集

長岡京市文化財調査報告書 第29・30集、長岡京市遺跡地図  
(第3版)

宇治市文化財調査報告 第3冊

八幡市埋蔵文化財発掘調査概報 第10・11集

京都府南山城村文化財調査報告 第1集

平成4年度 要覧

ほとけ・さむらい・むら—京都府指定・登録文化財が語る京  
都の文化展—

京都府立丹後郷土資料館要覧、特別陳列展図録 31

企画展資料 13・15、展示図録 8、関西文化学術研究都市開  
発地区緊急民俗調査報告書

文書の流転と保護、京都市の文化財、京都市史編さん通信  
No.233

第13・14回 企画展展示図録

綾部市資料館常設展示図録—母なる由良川—

京都府立総合資料館

(財)泉屋博古館

大谷大學文學部史學科

同志社大学校地学術調査委員会

仏教大学総合研究所

立命館大学文学部学芸員課程

網野町

福知山市

長岡京市

精華町

加茂町役場総務課町史編さん室

(財)宇治市文化財愛護協会

京都考古刊行会

口丹波史談会

精華町の自然と歴史を学ぶ会

中山修一先生喜寿記念事業会

濱田耕作先生著作集刊行委員会

(財)平安遷都1200年記念協会

八木史談会

(株)同朋舎出版

伊野近富

遊佐和敏

関口功一

福田 惇

水野正好

資料館紀要 第20号、京都府資料目録追録 No.8、総合資料館  
だより No.92

泉屋博古館紀要 第8巻

大谷大學史學論究 第4号

同志社大学キャンパスの遺跡

仏教大学総合研究所報 第2号

立命館大学文学部学芸員課程研究報告 第3冊

網野町誌 上巻

福知山市史 第4巻

長岡京市史 資料編二

精華町史 史料篇Ⅰ・Ⅱ

加茂町史だより紫陽花 第14号

文愛協会報 第30号

京都考古 第66・67号

丹波史談 平成3-特

波布理曾能 第9号

長岡京古文化論叢 Ⅱ

濱田耕作先生著作集 第5巻

(財)平安遷都1200年記念協会ニュース No.27

郷土史八木 第5号

前方後円墳-埋蔵されない墓をもとめて

東洋陶磁 第19号

東邦考古 第16号

東国史論 第7号

明日香風 第43号

古代を考える 近江



### 編集後記

暑い夏もようやく終わり、お彼岸の季節になりましたが、情報45号が完成しましたのでお届けします。

本号では、職員の研究を中心に掲載いたしました。日頃の研究成果をこの機会にお届けできることは、編集部喜びとするところであります。また、資料紹介も1本載せることができ、近年にない充実した号になりました。よろしく御味読ください。

(編集担当=土橋 誠)

## 京都府埋蔵文化財情報 第45号

平成4年9月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 株式会社大光社

〒604 京都市中京区間之町通二条下ル  
TEL (075)222-1333 (代)